

地域における大学の意義と課題

－高校生・市民に対するアンケート調査より－

地域の大学を考える研究会

執筆担当：田村龍一（稚内北星学園大学准教授） 1.2～6.2、8

米津直希（稚内北星学園大学准教授） 1.1、7

● 要約

本稿は、稚内北星学園大学の有志の教員によって発足した「地域の大学を考える研究会」における研究成果の報告を目的としている。本研究会は2019年12月下旬より「地域の大学に関するアンケート」を実施し、市民に対して大学に関する意識調査を行った。この調査を通じて、これまでの大学の総括を行い、今後のあり方について検討した。結論として、多くの市民が「地域に大学は必要」と考えられていることや、大学があることによる地域の活性化が期待されていることが分かった。一方で、高校生を含む市民全体の関心や課題と大学の教育研究が必ずしも一致していないことや、大学の教育研究内容が理解されていないことが分かった。地域の大学としての役割を果たすためには、教育内容等についてより詳しく知ってもらうことや、地域のニーズに対して大学がどのような研究的貢献をできるか情報を提供すること等が必要である事が示唆された。

● キーワード

地域の大学

大学の地域貢献

大学の意義

稚内北星学園大学

目次

1.	はじめに	87
1.1.	背景と研究課題	87
1.2.	方法	87
2.	アンケートの概要	88
2.1.	アンケートデザイン	88
2.2.	配布・集計の概要	89
3.	地域に大学があることの意義に関する結果（高校生・市民）	90
3.1.	地域に大学・高等教育機関は必要か	90
3.2.	地域の大学・高等教育機関に期待すること（複数回答）	91
3.3.	今後地域から大学・高等教育機関がなくなるとしたとき、考えられる懸念について（複数回答）	92
3.4.	稚内北星学園大学の「認知度」	93
4.	高校生への質問と回答結果の分析	96
4.1.	高校卒業後の進路別の回答の違い	96
4.2.	考察 — 「高卒後の進路意向」と「地域の大学の必要性」の関係 —	101
5.	市民への質問と回答結果の分析	104
5.1.	仕事と大学の関連性	104
5.2.	仕事と大学教育の関連性	105
5.3.	仕事と大学研究の関連性	105
5.4.	稚内出身学生の雇用に対する意向	106
5.5.	子どもの進路決定と大学	106
5.6.	子どもの就職する地域	108
5.7.	まとめ	109
5.8.	自由回答欄に寄せられたコメントについて	109
6.	結論と残された課題	110

6.1.	結論.....	110
6.2.	残された課題.....	112
7.	補遺：稚内北星学園大学発足の歴史的経緯.....	112
7.1.	開学の経緯.....	112
7.2.	開学後の概況.....	114
8.	資料.....	116
8.1.	高校生向けアンケート	116
8.2.	一般市民向けアンケート	117
8.3.	アンケート 仕様.....	118

1. はじめに

1.1. 背景と研究課題

2019 年 6 月に大学の経営難が明らかにされて以降、稚内北星学園大学では学内外の関係者と様々な検討が進められてきた。大学としての公式な検討は、主に稚内市(教育委員会)と合同で協議する「経営改善計画執行会議」において行われたが、焦点は「今後入学生を確保できるか」に絞られた。提案は行ったものの十分な成果があったとは言えなかった。大学はその後、教学と学生募集について集中的に検討する作業部会を立ち上げ協議を行ってきた。しかし今後の大学のあり方を考えるはずの教学改革作業部会については、理由を知らされないまま部会が開催されなくなってしまった(のちに経営移譲等についての協議が始まったからだと分かった)。

大学における協議はストップしてしまったものの、前述の経営改善計画執行会議への対応において、今後の大学のあり方や学生募集について教員全員が考え、発言する機会を得たことは重要なことであった。大学における教育の提供者であり、研究の主体である教員が大学のあり方について自覚的に考えることは、小規模で教員それぞれの活動が大学に対して直接的に影響を与える本学においては必要なことであった。そうした考えから、大学のあり方について議論を活性化させるための自主的な発信として、稚内北星学園大学教員有志による「地域の大学を考える研究会」を発足させ、研究的にこの問題を考えることにした。

本研究会の目的は「大学の今後について、有志によって研究的に議論し、成果を公開すること」であり、その上で、「大学の(存続)問題について議論し続ける場を作る」「これまでの大学の総括の場として機能させる」「対処療法的なものも含めつつ、本質的な議論をする」ことを目標として設定した。なお時期的には、研究会として位置付けていたとしても存続のための運動団体としてみなされたり、そのことで学内における分断を生んだりすることについては配慮する必要がある。そのため、発足当初は趣旨について繰り返し説明を行った。

本研究会では、大学のこれまでと今後を考えるために、アンケート調査を作成・実施して、市民が「大学そのもの」をどう捉えているのか、また今までの稚内北星学園大学がどうだったかについて、客観的に現状を知るための重要な調査として位置付けている。本研究会の活動はあくまで研究的活動であり、アンケート調査は、客観的分析のための調査を目的とするものである。

1.2. 方法

本論文では、市民にとっての「地域に大学/高等教育機関が存在することの意義」について、アンケート調査を基本とした社会調査を実施する。通常、大学の地域に対する機能については、新卒者の量と質や地域プロジェクトの成果といった、事後的な結果により検討を行うことが多い。それらに比べて本論文の特徴とは、高校生や市民といった、地域の大学の存在が直接または間接的に影響を与える当事者たちの意向という事前の情報によって、地域の大学の意義や今後直面するかもしれない課題を明らかにしていこうというアプローチである。事業成果といった事後的な客観的な指標を使うことはできないという欠点はあるが、高校生や保護者といった近い将来大学と関わりがあるかもしれない市民の意向を聞くことで、本アンケート調査は今後の地域と大学が直面するかもしれない課題を考察する情報を与えてくれる。宗谷地域唯一の大学である「稚内北星学園大学」についていえば、過去の取り組みに関しては COC 事業や大学への第三者機関による評価といった形で情報の蓄積が既に存在する。

そして 2019 年度には学生数減少による経営難の問題が明らかになった。本論文には、地域の大学である稚内北星学園大学の今後を考えるために、アンケートを用いて大学を取り巻く様々な市民の意向や意見を集約することで、有用な情報を提供するという価値があるとも考えられる。

さて、進路選択を間近に控えた市内高校生については、就職/進学とその場所(市内/市外)に対する意向というアンケート調査を実施し、この回答状況から地域の大学の意義と地域の課題を明らかにする。高校生は卒業に際して、進学するか、それとも就職するか、進学や就職の場所は市内か、それとも市外かという選択を行うことになる。このような卒業後の進路への意向は、地域の大学に対する意識に影響を及ぼす可能性がある。アンケートではこの点を明らかにする質問と回答選択肢を準備している。また、地域唯一の大学である「稚内北星学園大学」をとりあげ、市内高校生によるこの大学の教育・研究・地域活動の認知度を明らかにする。

一般市民に対しては、自身の仕事との関連性と子どもの進路選択をサポートする親としての意向を問うアンケート調査を実施し、地域で発揮し得る研究・教育というアカデミックな役割や新卒者を提供する機関として大学が地元の産業や保護者にどのように捉えられているかを明らかにする。

2. アンケートの概要

- 回答期間:2019 年 12 月下旬～2020 年 2 月中旬まで
- 対象者:一般市民、および市内 2 高校の 1 年生から 3 年生(普通科・看護科・定時制含む)
- 回答者数:918 名
 - 一般市民:167 名
 - ◇ 第 1 次産業(農林漁業・酪農業):21 名
 - ◇ 第 2 次産業(建築・土木業):12 名
 - ◇ 第 3 次産業(それ以外の全ての職種):134 名
 - 高校生:751 名。これらは全て 2 高校合計の人数である。
 - ◇ 高校1年生:215 名
 - ◇ 高校 2 年生:271 名
 - ◇ 高校3年生:265 名

2.1. アンケートデザイン

市民や高校生の地域の大学に対する捉え方は、無関心を含めて多様であることが予想される。これらを分析可能な形で集約するために、アンケートでは、各問に対して本研究会での議論によって設定したいくつかの選択肢を用意し、あてはまるものを選んでもらうという回答形式を採用した。問いによっては「思う/思わない」「はい/いいえ」の二択形式や、該当する選択肢を全て選んでもらう複数回答を用意してある。また研究会が想定していない市民の多様な思いをとらえるために、自由回答を含めた問いもある。詳細については、本論文末尾の付録 8.3 を参照されたい。

アンケート設問の中心になるのは、「地域に大学が必要と思うか」(「はい/いいえ」の二択)という質問であり、さらにこの回答の背後にある市民の考えをとらえるために、「地域の大学に今後期待すること」「地域の大学が失われた

としたときに地域社会全体に対して懸念されること」(いずれも複数回答+自由回答)という2つの質問を続けた。これらに対する回答状況は、市民から直接的に地域の大学に対する意向を知る第一の結果となる。

アンケートでは地域唯一の大学・高等教育機関である「稚内北星学園大学」がこれまで提供してきた活動内容のうち、教育内容・研究活動・地域活動の3つの点について、市民の認知度を聞いている。この部分は、この大学がこれまでどのように市民に見られてきたかについて、直接的に知ることができる貴重な情報であると考えられる。

アンケートでは同時に、回答した市民・高校生の社会的属性も調査している。「地域に大学が必要である・必要でないと考える回答者はどのような社会的背景をもっているのか」という視点で分析を行うことで、上記の回答結果と社会的背景の関連性が明らかになる可能性がある。アンケート分析では、以下の社会属性による回答状況の相違・類似を考察している。

1. 高校生

(ア) 進学・就職の意向

(イ) 進学・就職する場所(市内または市外)

2. 市民

(ア) 従事する産業種別

(イ) 高校卒業・進路選択を控えた子どもをもつ保護者

高校生については、進路選択の意思決定までの時間、すなわち学年の違いによって地域の大学に対する意識は異なることが予想される。また、卒業後に市内で生活したい高校生と市外で生活したい高校生では、地域(市内)の大学に対する意識は異なることが予想される。例えば、市外に出る意向の高校生は地域の大学に対する関心がそもそも薄い可能性があるだろう。高校3年生は高校1年生に比べて大学をより身近なものとして捉え、自身のキャリア形成に大学がどれくらい役に立つのかをより真剣に考えているだろう。

市民については、従事する産業・職種固有の特徴により、地域の大学に対する意識は異なる可能性がある。大学の研究教育で扱われ得る、いわゆる先進技術を導入したい企業・産業と、当座その予定がない企業・産業では地域の大学に対する認識は質的に異なっているはずである。また、家族の中に進学・就職といった進路選択を行う者がいるかどうかで、回答者の大学や高等教育の特に教育面に対する期待や認識の度合いは大きく異なってくるだろう。

アンケート分析では、地域の大学の活動がどのように市民に捉えられているのかについて、以上のような社会属性の違いを考慮することによって、地域の人々や社会との関連性を明らかにし、これによって地域の大学の意義と課題を明らかにする。

2.2. 配布・集計の概要

市内2高校(北海道稚内高校普通科・看護科・定時制、私立稚内大谷高校)の担当者に配布を依頼し、ホームルームの時間などを利用して紙媒体のアンケートに回答をしてもらった。当日欠席した生徒、回答を放棄した生徒を除けば、

高校生に対するアンケート調査は実質的に「全数調査」に近いといえる。

一般市民への配布は次の2つの方法で行われた。ひとつは、本研究会が Google Forms 上オンラインアンケートを設置し、パソコンやスマートフォンで回答してもらうという方法である。もうひとつは、稚内市内の町内会代表が集う組織の会合にて本アンケートの趣旨を説明し、各町内会で5部ずつ担当してもらう¹。町内会ごとにどの家庭に回答してもらうかについては、町内会代表に任せることにした。

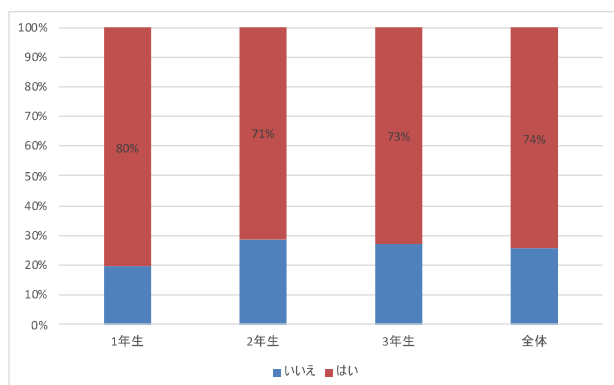
Google Forms を用いたインターネットアンケートの方法については、提示された URL に能動的にアクセスすることが必要になる。そのため、この方法による回答者は、稚内北星学園大学の存廃報道やこれまでの取り組みに何らかの接点があり、大学の意義に関心のある市民に偏っている可能性が高い。

紙媒体のアンケート はインターネットアンケートと同様に Google Forms に入力し、集計・分析を実行した。

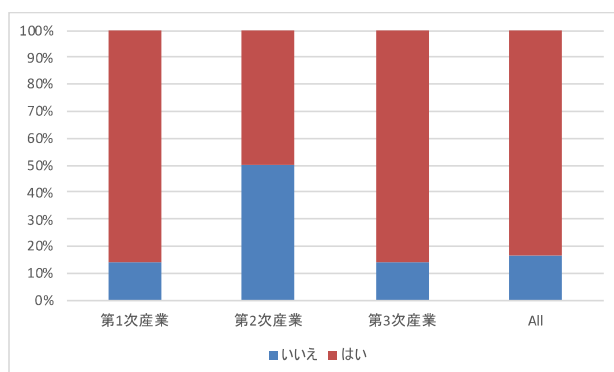
3. 地域に大学があることの意義に関する結果（高校生・市民）

3.1. 地域に大学・高等教育機関は必要か

稚内北星学園大学に限定せず、この地域に大学や高等教育機関は必要かどうかについて、「はい」「いいえ」の2択形式で質問をした回答結果は次の通りである。高校生は全体で74%、一般市民は83%が必要であると回答している。必要性に関しては4人中3人が肯定的であると考えて良いと思われる。



	いいえ	はい
1年生	20%	80%
2年生	29%	71%
3年生	27%	73%
全体	26%	74%



	いいえ	はい
第1次産業	14%	86%
第2次産業	50%	50%
第3次産業	14%	86%
全体	17%	83%

図 3-1 「地域に大学は必要か」に対する回答：高校生（上）と市民（下）

¹ この点については、稚内北星学園大学但田勝義教授からの多大なるサポートを賜った。厚く感謝申し上げる。

3.2. 地域の大学・高等教育機関に期待すること（複数回答）

次に、「大学が存在するとしたら何を期待するか」について、こちらで用意した 6 つの選択肢と自由回答を選択してもらった結果は以下の通りである。

3.2.1. 高校生

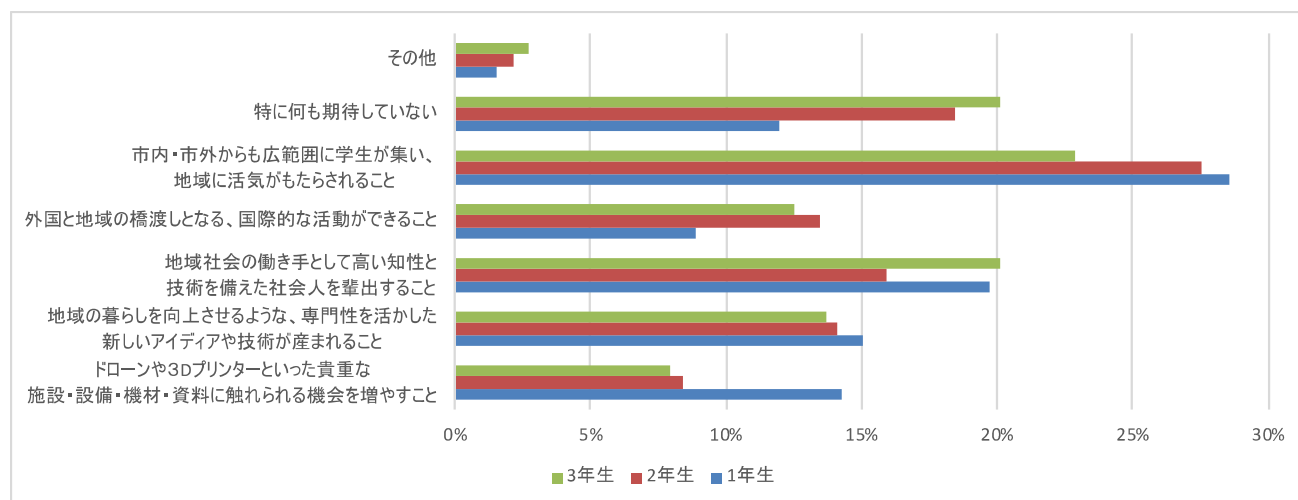


図 3-2 大学への期待（複数回答）＋自由回答：高校生

どの学年でも、「市内・市外からも広範囲に学生が集い、地域に活気がもたらされること」への期待が最も多く、3 年生は「地域社会の働き手として高い知性と技術を備えた社会人を輩出すること」への期待も高い。一方で、「特に何も期待していない」への回答は学年が上がるにつれて上昇し、高校 3 年生は約 2 割が特に何も期待していないようである。

3.2.2. 市民

回答傾向は高校生と同様であるが、高校生が期待している選択肢への集中度合いが高い。回答比率が低い選択肢についていうと、国際的な活動ができることに対する期待は高校生は 10%程度持っているのに対して、市民は 5%未満であり、「特に何も期待していない」の回答比率は 5%程度であり、例えば高校 3 年生の回答割合の 1/4 程度である。市民は若者による活気、地域の担い手となる優れた社会人、専門性を活かしたイノベーションに特に期待が集まっていることが分かる。

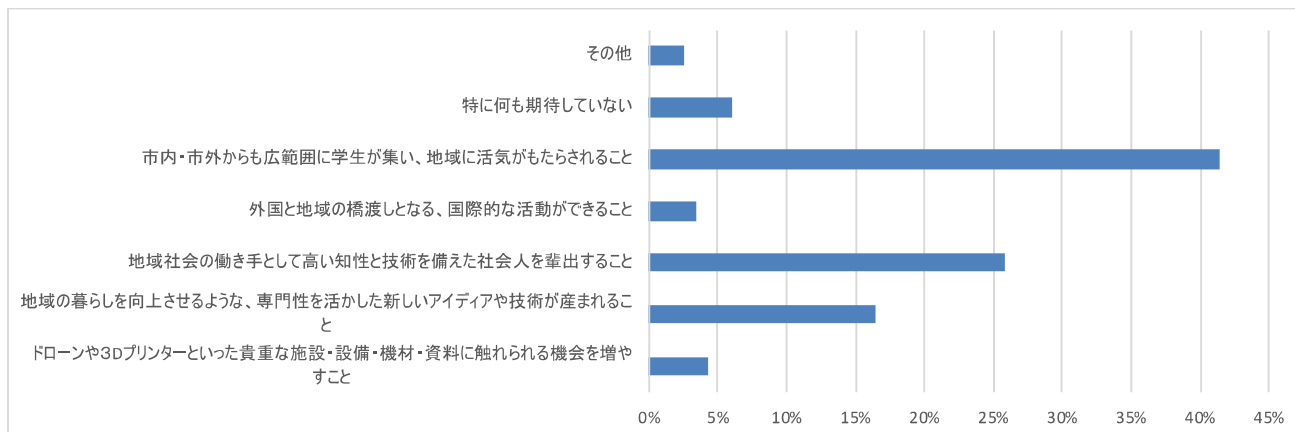


図 3-3 大学への期待（複数回答）＋自由回答：市民

3.3. 今後地域から大学・高等教育機関がなくなるとしたとき、考えられる懸念について（複数回答）

3.3.1. 高校生

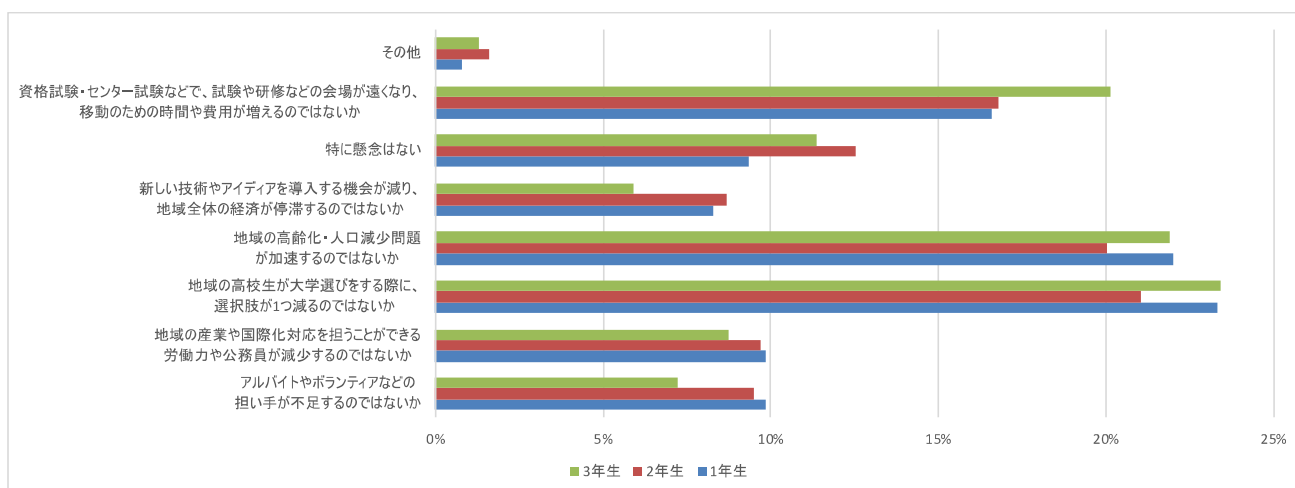


図 3-4 大学の喪失に対する懸念（複数回答）＋自由回答：高校生

全学年共通して「地域の高校生が大学選びをする際に、選択肢が1つ減るのではない」という選択肢への回答が最も多い(全体で 24%)。特に 3 年生については、「地域の高齢化・人口減少問題が加速するのではない」「資格試験・センター試験などで、試験や研修などの会場が遠くなり、移動のための時間や費用が増えるのではない」という回答割合も 2 割を超えており、高校卒業にあたっての進路選択の時期に、より切実な懸念として捉えていることがうかがえる。

3.3.2. 市民

高校生と同様、「地域の高校生が大学選びをする際に、選択肢が1つ減るのではない」という選択肢への回

答が最も多い。一方で、「特に懸念はない」の回答割合は 3%未満であり、高校生の回答割合(およそ 10%)よりも顕著に小さい。

全体的に、高校生の回答に比べて多くの選択肢に回答が分散する傾向を観察することができる。この違いは、進路選択の当事者である高校生と比べて、市民は大学が喪失することによる地域社会への影響についてより幅広い関心を抱いていると解釈することができよう。

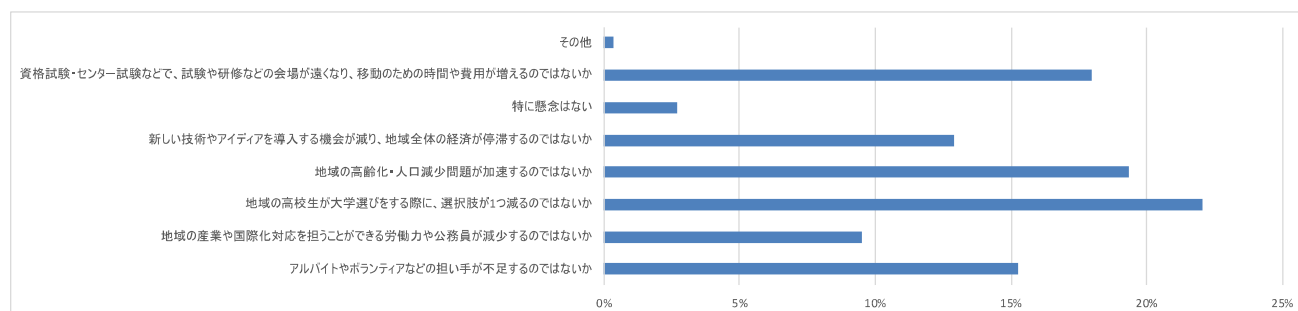


図 3-5 大学の喪失に対する懸念（複数回答）＋自由回答：市民

3.3.3. 稚内北星学園大学の「認知度」

アンケートでは地域唯一の大学である「稚内北星学園大学」が高校生・市民にどの程度認知されているかを明らかにした。まず、単純に回答者に「存在を知っているか」について「はい」「いいえ」の 2 択で回答してもらったところ、高校生・市民ともに 97%以上が「はい」すなわち知っているとの回答を得た。

しかしながら、2019 年下半期の一連の存廃報道といったニュース報道のみ、もしくは市内にあることくらいはなんとなく知っている、という人々も存在するのではないかと。そこで、回答者がこの大学が提供している内容についてどの程度知っているかを「認知度」として定義し、「教育」「研究」「地域活動」の 3 つの内容について、「知っている」「知らない」という 2 択を提示した。認知度は回答総数に占める「知っている」の割合によって計算される割合である。以下それぞれに対する認知度を示す。

3.3.4. 教育内容に対する認知度

本学の中心的な教育内容の 1 つである「IT 技術」に関する認知度が特に高く、それ以外の教育内容はほぼ 3 割以下の認知度となった。

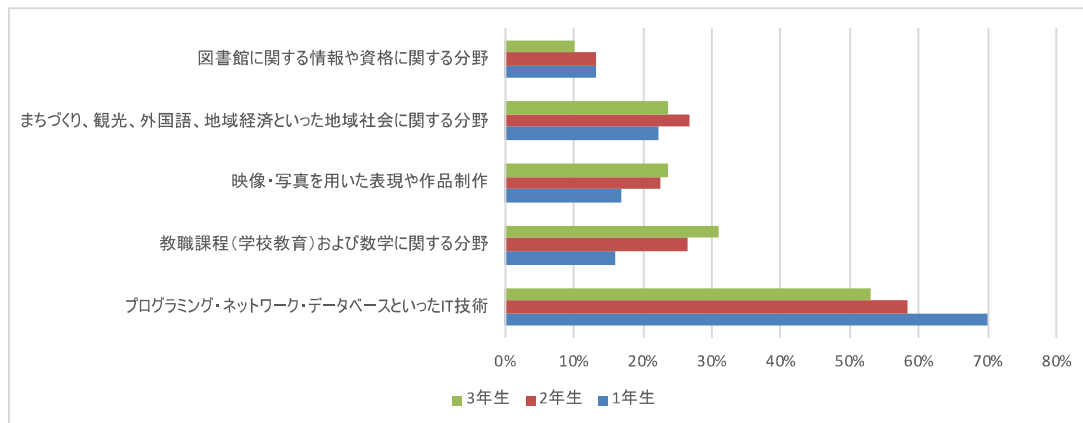


図 3-6 大学の教育内容に対する認知度 (%) : 高校生

市民の認知度は産業によって大きな違いが見られる。第 3 次産業はどの教育内容についてもまんべんなく認知度が高いようであり、第 1 次・2 次産業については、高校生と同様 IT 技術に関する知名度が他の選択肢と比べて高い。

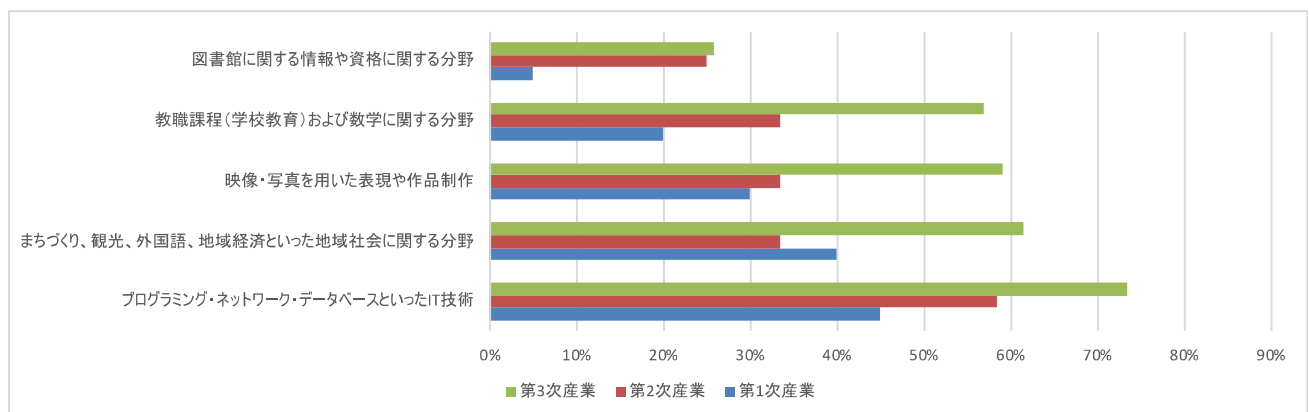


図 3-7 大学の教育内容に対する認知度 (%) : 市民

3.3.5. 研究内容に対する認知度

本学在籍教員の研究的側面の知名度を知るために、本学教員の研究分野を 9 つに分類し、それぞれに対する高校生の認知度を回答してもらった結果は図 3-のとおりである。ET ロボコン(小泉教授)や IoT(ゴータム教授)、映像作品に関する研究の認知度が高いようである。また、高等数学についても 3 年生の認知度が 2 割を超えている。これは澁谷教授の研究成果のひとつである「数学博物館」の市内への露出が高かったためと思われる。

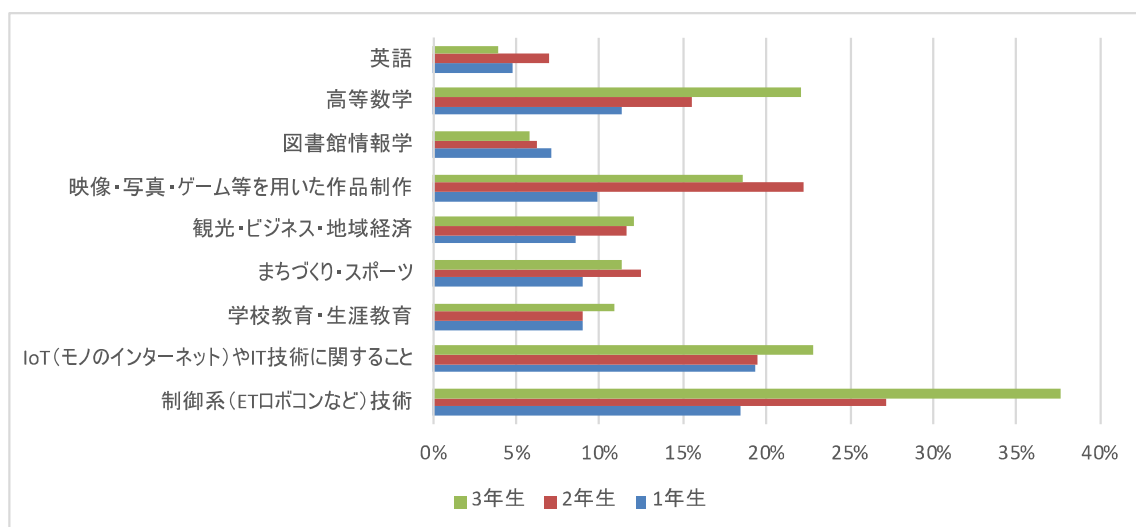


図 3-8 大学の研究に対する認知度 (%) : 高校生

市民の認知度については、本学で数々の受賞歴がある映像制作と制御系技術の認知度が高い。第3次産業では他産業と比べて全体的に研究に関して高い認知度があることも観察される。

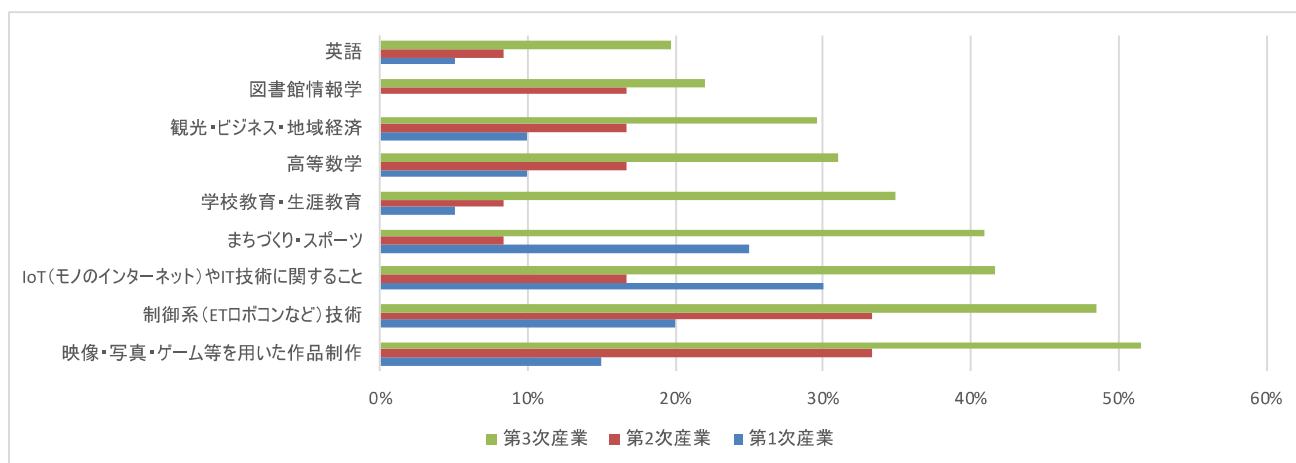


図 3-9 大学の研究に対する認知度 (%) : 市民

3.3.6. 地域活動内容に対する認知度

本学が毎年継続的に行っている地域活動に関する高校生の認知度を問うた結果は図 3-のとおりである。高校生については、総じて低学年の方が認知度が高い結果となっている。例えば「小中学生を対象とした学習支援活動」は高校1年生の認知度が最も高く、学年が上がるにつれて下がっていく。本学の教職課程の学生による学習支援活動に参加した中学生が高校に進学した結果、高い認知度となったと推察される。しかしながら、全体的に認知度は高くても25%程度である。COC事業をはじめとして継続的な地域活動を行ってきた大学としてはやや物足りない認知度である。本学の地域活動を高校生に認知させるためにはいっそうの努力が必要とも思われる。

一方で図 3-4にあるように、市民の地域活動への認知度は、第1次産業をのぞいておおむね高校生よりも高くなっている。特に高いのが、第三次産業従事者の「地域や市が主催する祭・イベントへの参加」である。大学生が地域の催しに積極的に参加することは大事であるが、一方で、地域の活性化や映像作品といった「大学発の

地域へのアカデミックな働きかけ」についてはそれほど認知度が高いわけではないことにも留意すべきである。今後は教育・研究内容をベースにした地域活動の展開を意識するという方向性が考えられるだろう。

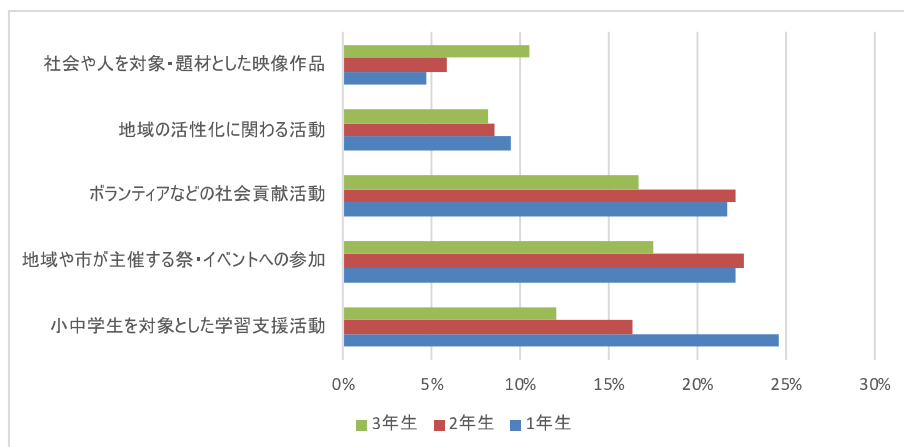


図 3-10 大学の地域活動に対する認知度(%)：高校生

その他、高校生が知っている地域活動として自由回答に記されたのは、留学生や学園祭といったことであった。

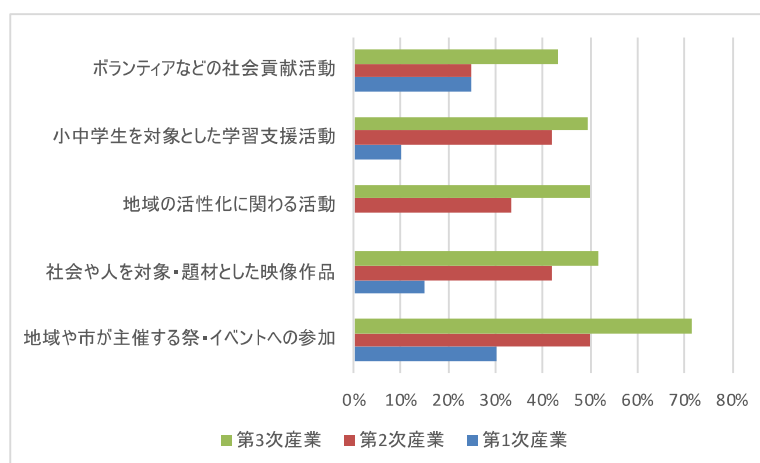


図 3-4 大学の地域活動に対する認知度(%)：市民

その他、市民が知っている地域活動として自由回答に記されたのは、学園祭で実施されるフリーマーケット、市の広報誌の作成、生涯学習講座、教員免許更新時講習、わっかないコーヒーフェスティバル、まちラボ(COC 事業)となった。

4. 高校生への質問と回答結果の分析

4.1. 高校卒業後の進路別の回答の違い

アンケートでは、高校生に対して卒業後の「就職・進学(専門学校なども含む)」の意向、またそれぞれについて「市内・市外」のどちらを選択するかについても質問している。その集計結果は図 4-1 の通りである。

卒業後の就職・進学意向の比率はおよそ 4:6(39% vs 61%)で進学の方が多い。最終的に市内で暮らしたい比

率は 40%であり、進学意向の有無を問わず半数以上(60%)が市外で暮らしたいと考えている。進学意向を示した高校生のほぼ全て(96%)が市外へ進学したいと考えている。

市外の大学・専門学校に進学し卒業後に市内で暮らす意向があるのは 3 割(27%)にとどまる。進学によってひとたび市外に出てしまったら、大多数は稚内に戻ってこないという、高等教育を受けた若年層の流出問題が今後とも存在し得ると考えることができる。

またわずかではあるが(4%)、市内の大学に進学する意向を持っている高校生は、多くの場合(87%)市内で暮らしたいと考えている。要約すれば、市内高校生の過半数は今後の生活の場として「市外」を考えているということである。

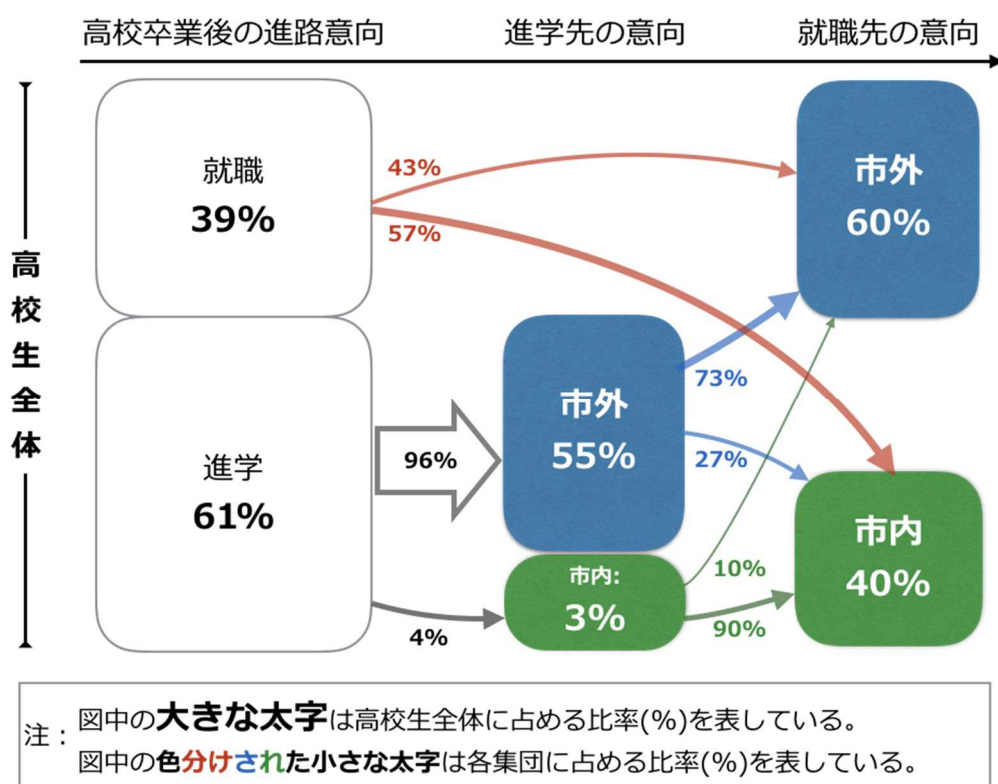


図 4-1 進学/就職意向と地域の選択

市内の高等教育機関を「稚内北星学園大学」ひとつと仮定した場合、このような学生の進路意向の中で、稚内北星学園大学はどのくらいの新卒者を送り出すことができるのか。この点を調べるために、最終的に市内で暮らす意向をもつ 40%の高校生の進路別構成比を計算し、表1に示した。表 1 より、現在の高校 1～3 年生をベースにした場合、5.6%が新卒者となって稚内市で働き始めることになる。この比率は市外の高等教育機関出身の新卒(38.9%)の 1/7 ほどである。

	人数	比率
市内大学出身	17	5.6%
市外大学・専門学校出身	118	38.9%
市内高校出身	168	55.4%
合計	303	100.0%

表 1 市内で暮らす意向をもつ高校生の構成比

さて、高校生は図 4-1 のように多様な進路意向をもっていることが分かる。アンケートでは、なぜ彼らがその進路を志望するのか、その理由についても聞いているので、以下でその集計結果を示す。

まず、地元の大学に進学する意向を示した高校生に対して、その理由を 6 つの選択肢の中から選んでもらった結果が図 4-2 である。どの学年でも地元だから、お金がかからないから、家族や親戚の存在、稚内が好きといった、大学で学ぶ直接の目的ではない選択肢に回答が集まっていることに注意を要する。一方、「学びたいことが学べる」という選択肢には 3 年生の 10%程度が選択するのみである。地元の大学に進学する理由は、学びというより、地元帰属意識であることが明確に分かる。

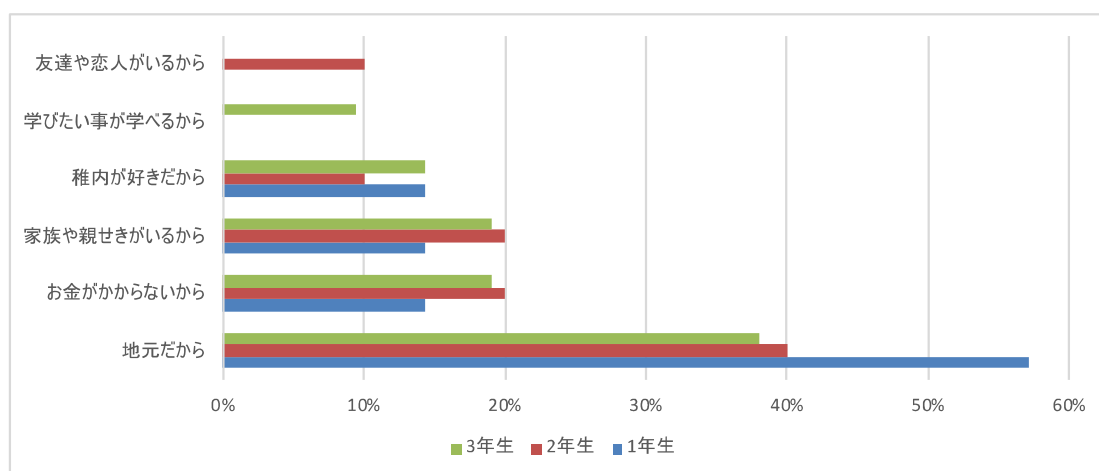


図 4-2 地元の大学に進学する理由

次に、進学先を市外と回答した高校生に、地元の大学に進学するための条件について聞いた結果が図 4-3 である。「どんな条件があっても入りたいとは思わない」という回答は 14%であり、最も多い(42%)のは「自分の学びたいことが学べる」ということである。市外に進学する意向をもつ高校生は、地元の大学への進学を最初から全く進路に考えていないというよりはむしろ、自分の学びたいことが学べるのであれば選択肢のひとつとしても考慮され得る可能性が示唆される。

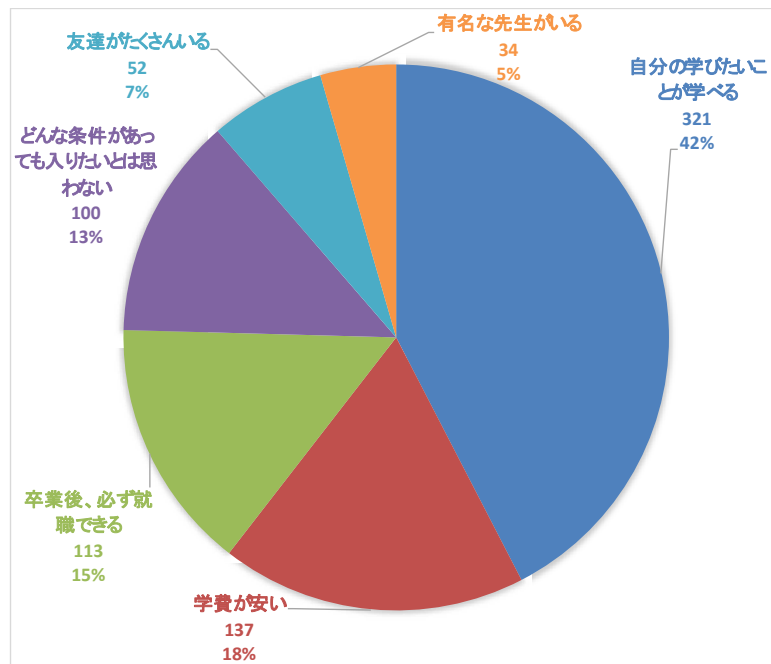


図 4-3 地元の大学に進学する条件

この点をさらに調べるために、市外へ進学意向をもつ高校生にその理由を問うた結果が図 4-4 である。この結果は上記図 4-3 と整合的で、ほぼ半数が「稚内の大学では学びたいことが学べないから」を選択している。「稚内が好きじゃない」という理由で市外に出ていく高校生は 1 割に満たない。高校生は学びたいことが提供されているのが市外の高等教育機関にあるから、市外に出るのである。

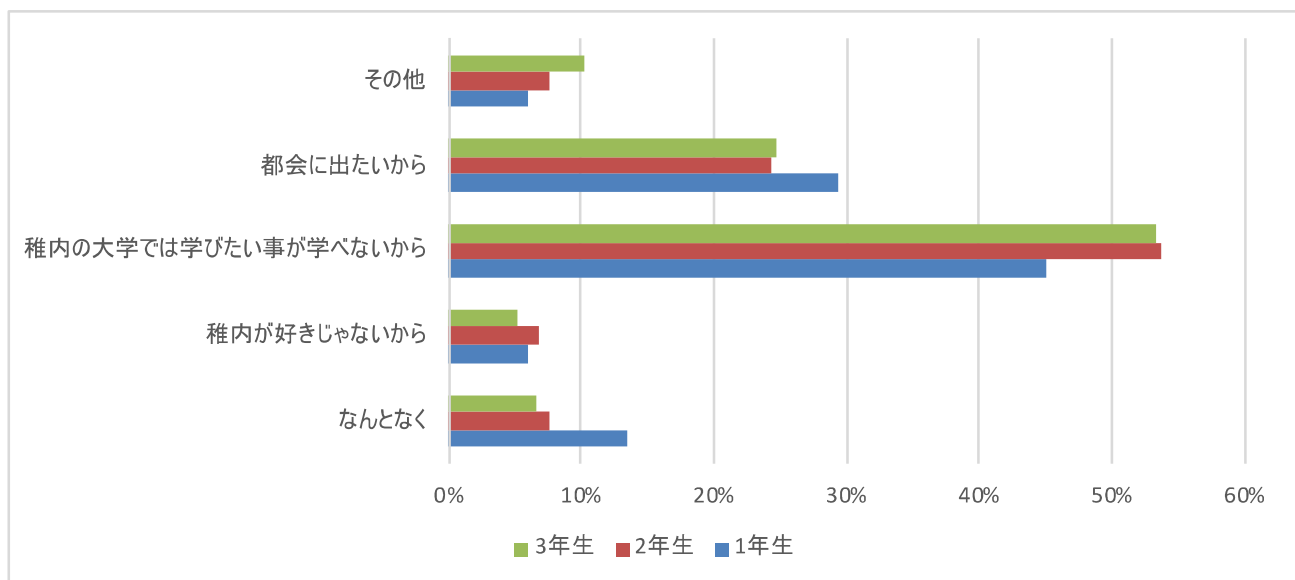


図 4-4 市外の大学に進学する理由

市外の大学で学びたい分野を具体的に自由回答欄へ記述してもらったところ、合計で 94 件の回答があった。回答の多い順に分野を集計した結果は以下の通りである：

1. 保育・社会福祉
2. 医療・看護・薬学
3. 理系分野(土木・建築・機械)
4. 社会系分野(経済・経営)
5. 人文系分野(英語・心理学)

その他、情報系分野を記した回答数件を含め、稚内北星学園大学で現在提供している教育内容を記す回答も少なからず存在することが判明した。そのような回答の中には、この大学が学びたい内容を提供していることを知った上でより高レベルの大学に挑戦したい高校生、または自分のやりたい分野を稚内北星学園大学が提供していることを知らない高校生が含まれていると推察される。市内唯一の大学である稚内北星学園大学としては、後者の高校生の関心をむかせるような露出努力が必要であると思われる。

以上の進学意向の結果は次のようにまとめることができる。

- 地元に進学する主な理由は「学びたいことがあるから」よりも、「地元意識」。市外に進学する主な理由は「稚内では学べないことを学ぶため」。進学後の分野が明確になるにつれ、市外への進学意向をもつようになる。
- 市外で学びたい分野の中には、既に稚内北星学園大学が提供している内容も含まれている。高校生に対して教育内容の露出を増やしていくことが大事になるかもしれない。

次に、高校生の暮らしの場の選択について調べてみよう。まずは地元で暮らす意向をもつ高校生の回答理由を集計したのが図 4-5 である。

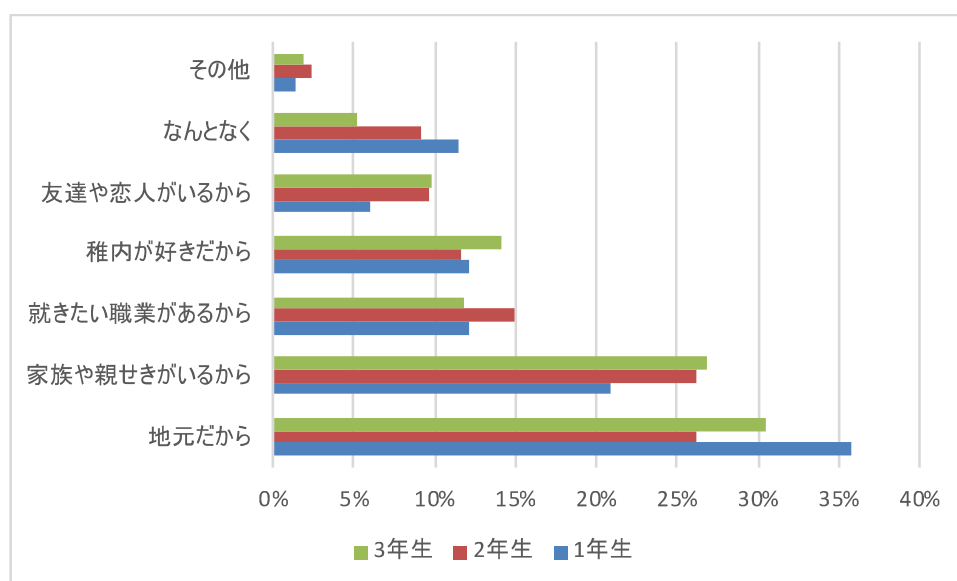


図 4-5 地元で暮らす理由

選択肢で最も多い回答は、全ての学年で「地元だから」、次いで「家族や親せきがいるから」であり、「就きたい

職業があるから」がその後に続く点が重要であると考えられる。地元で暮らす理由は職業という直接的な動機ではなく、地元意識という間接的な動機が優先される傾向にあるということである。

市外で暮らす理由の回答結果は図 4-6 に示したとおりである。この図から分かるように、「稚内が好きではないから」という回答比率は、進学先の調査と同様 1 割程度であり、「地元で暮らしたい」高校生の「稚内が好きだから」の回答比率とはほぼ差がない。一方で、やりたい仕事などが無い、都会に出たいからという回答が 3 割以上を占めている。自由回答「その他」には 1 年生が 18 人、2 年生が 19 人、3 年生が 32 人記述している。1、2 年生は「地元が稚内ではないので地元に戻りたい」という回答が多く、3 年生はそれに加え、稚内では実現が難しいと彼らが考えている「生活の利便性・職の多様性」を求める回答が多い。

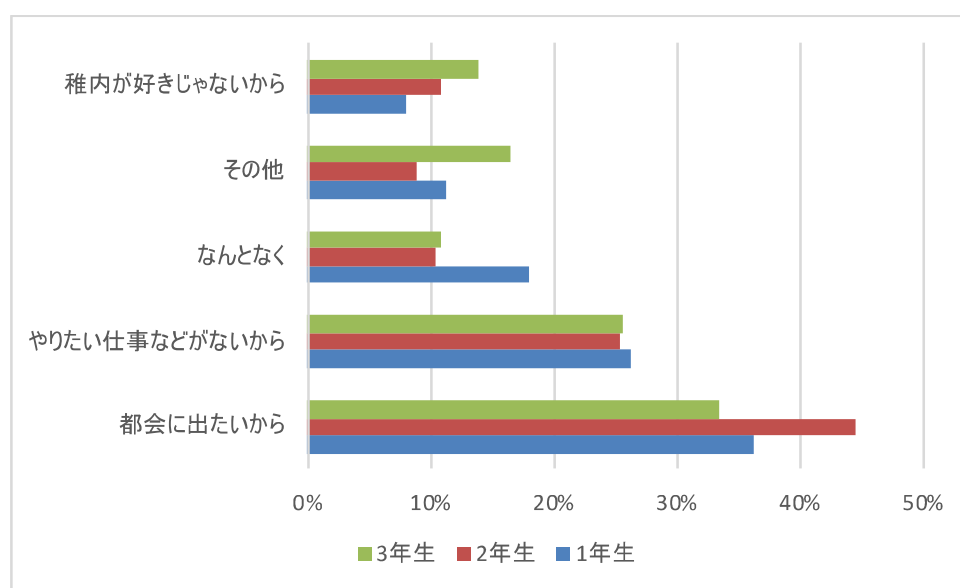


図 4-6：市外で暮らす理由

以上より、暮らす場所に関する高校生の回答は、次のようにまとめることができるだろう。

- 高校生にとって、暮らしの場所を市内・市外に選ぶ理由の中で「稚内が好きか否か」という情緒的な選択肢は全体的にはさほど重要ではない。
- 市外で暮らす主な理由は、「やりたい仕事、より便利な生活環境を得ること」である。
- 市内で暮らす主な理由は「職業」よりも、友人・家族・親戚による地元帰属意識である。

4.2. 考察 —「高卒後の進路意向」と「地域の大学の必要性」の関係—

4.1 のアンケート集計結果から、市内高校生の地元稚内という地域に対する進学・就職の意識は以下の2点に要約することができる。

1. 半数以上が市外に出ていくが、その理由は自分のやりたい学業の分野や職業が、この地域に存在しないか

らである

2. 市内への進学や就職を考えている理由は、進学先・職業という直接的要因よりも、地元への帰属意識である

市外に出ていく意向をもつ高校生にとって、地域の大学はどのように認識されているのだろうか。これは市内に進学先や暮らしの場を求める高校生の認識とどのように違うのだろうか。この点を明らかにするために、「進学に関する意向の結果・就職に関する意向の結果」と、「地域の大学の必要性・存続への期待・喪失への懸念の結果」の回答状況の関係性について分析しよう。

4.2.1. 地域に大学があり続ける場合の、期待について(1)：進路との関係

高校卒業後、進学・就職という進路にかかわらず「広範囲に学生が集い、地域に活気がもたらされること」という期待への回答が最も多い。特に進路が進学の高校生の回答比率が顕著である。進路が就職の高校生は地域の暮らしの向上や働き手の供給を期待している一方、比率は小さいが進路が進学の高校生は「国際的な活動ができること」を期待のひとつに挙げている。

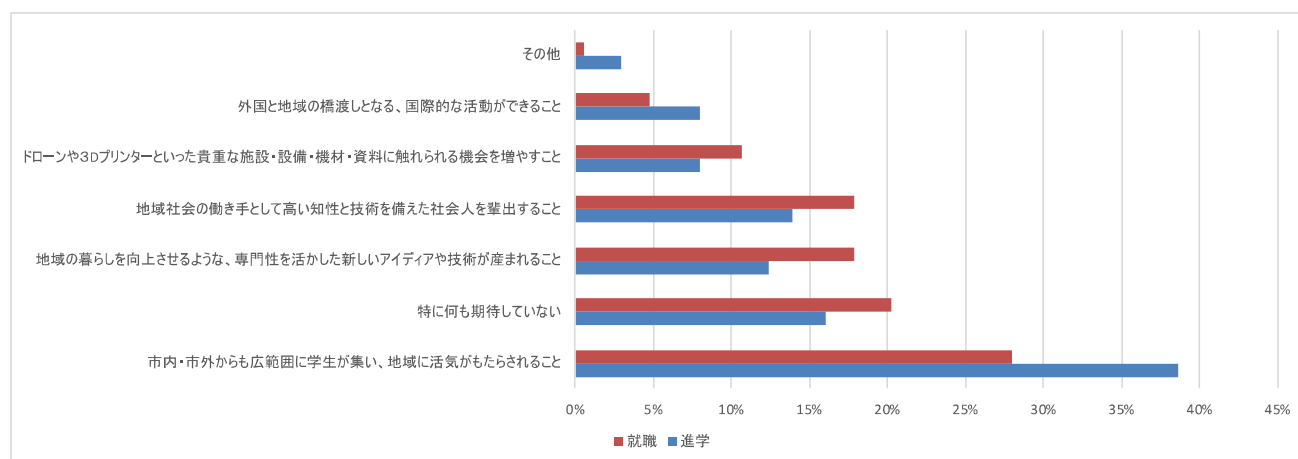


図 4-7 高卒後の進路と大学への期待の関係

4.2.2. 地域に大学があり続ける場合の、期待について(2)：暮らす場所との関係

どちらも若者による地域の活性化に期待している。特に何も期待していない回答比率は、市外に出る予定の高校生の方が高い。就職して市内で暮らす意向の高校生は「地域の暮らしを向上させるような、専門性を活かした新しいアイデアや技術が産まれること」に対する期待が相対的に高いのに対し、市外で暮らす意向の高校生は「外国と地域の橋渡しとなる、国際的な活動ができること」が相対的に多い。

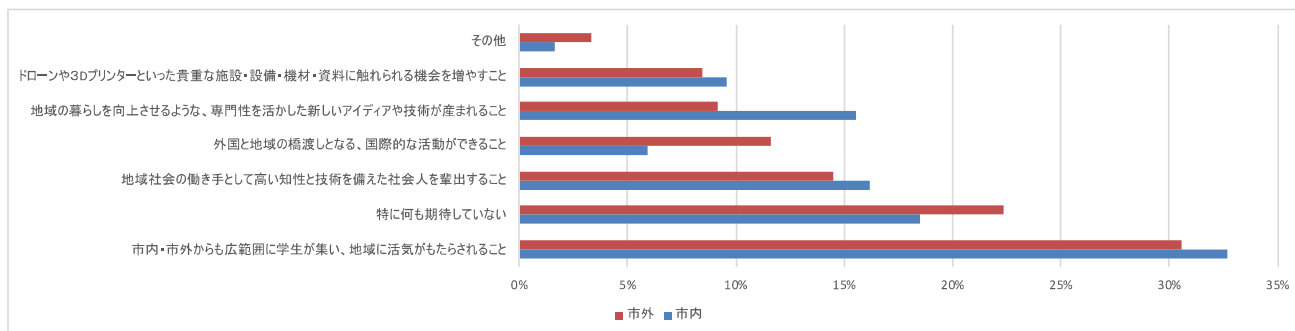


図 4-8 暮らす地域と、大学への期待の関係

4.2.3. 地域から大学がなくなる場合の、懸念について(1)：進路との関係

大学の喪失が地域に及ぼし得る影響を記した多くの選択肢で回答割合に顕著な差は見られなかった。ただし、就職意向の高校生は大学進学の当事者ではないので、「特に懸念がない」という回答が倍以上となっている。双方ともに最大の懸念は「地域の高齢化・人口減少問題が加速するのではないか」である。

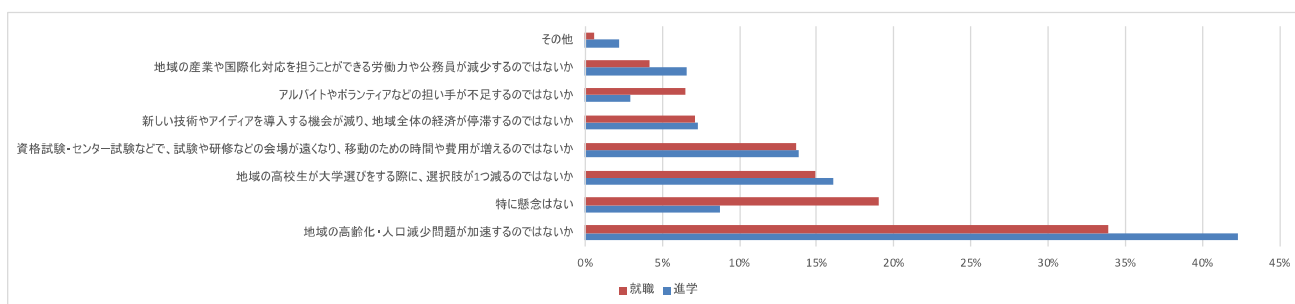


図 4-9 進学意向と、大学の喪失に対する懸念の関係

4.2.4. 地域から大学がなくなる場合の、懸念について(2)：暮らす場所との関係

図 4-10 で示したように、市内で就職して暮らす意向の高校生は「地域の高齢化・人口減少問題が加速するのではないか」「新しい技術やアイデアを導入する機会が減り、地域全体の経済が停滞するのではないか」「アルバイトやボランティアなどの担い手が不足するのではないか」といった、地域の利便性や活力の低下に対する懸念が多く、市外で就職する意向の高校生は、当事者ではないために「特に懸念はない」という回答が相対的に多い。双方ともに最も回答されているのは、「地域の高齢化・人口減少問題が加速するのではないか」という懸念である。

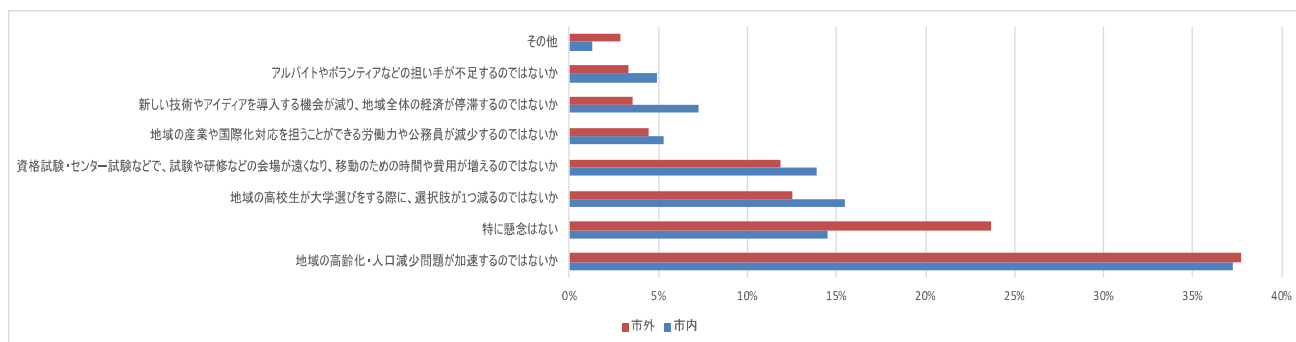


図 4-10 暮らす地域と、大学の喪失に対する懸念の関係

4.2.5. まとめ

以上、大学の意義について進路・暮らしの場に分けて分析した結果は次のように要約できる。

- 進学・就職が市内・市外にかかわらず、多くの高校生が「広範囲に多くの大学生が集まることによる地域の活性化」を期待し、「地域の高齢化・人口減少問題の加速」を憂慮している。
- 市内で暮らす意向の高校生は、地域の現状の改善に大学の意義を見出している。対照的に市外で暮らす意向の高校生は「国際性」という新しい大学の方向性に意義を見出している。
- 進路選択と地域の大学の関わりが少ないほど、大学の意義に関する問題意識は低い傾向にある。

5. 市民への質問と回答結果の分析

5.1. 仕事と大学の関連性

市民に対するアンケートでは、はじめに「大学と自身の仕事との関連性」について聞いている。図 5-1 にあるように、市内の産業に対して関連性があるという回答は 37%に留まった。

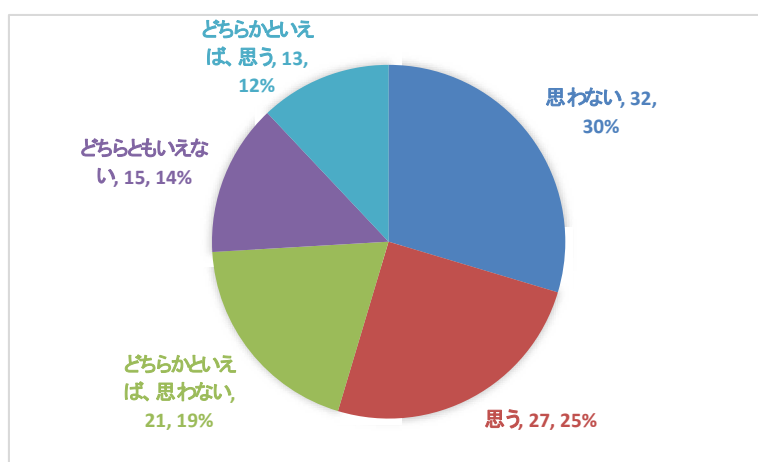


図 5-1 大学と仕事の関連性について

この回答をさらに深く理解するために、産業別に大学の教育・研究面との関連を具体的に聞いたのが以下の質問である。

5.2. 仕事と大学教育の関連性

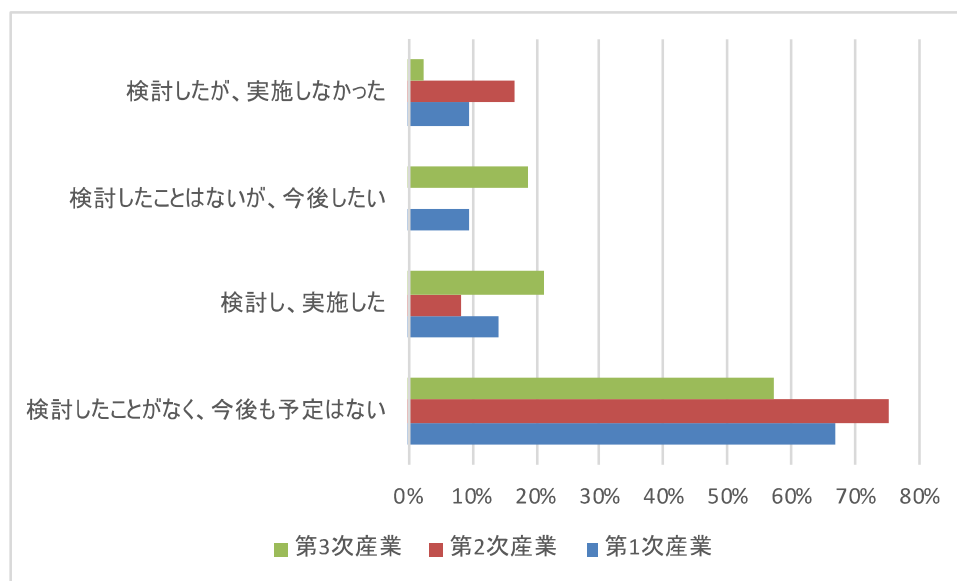


図 5-2 大学の教育を仕事に活用することについて（産業別）

このように、稚内市の産業にとっては大学教育を有効活用するきっかけが存在していないのが現状である。しかしながら、自由回答欄には大学教育を受けた学生の発想や考え方を活用したい、農業といった第1次産業での活用の可能性を指摘する意見もあった。一方で、「大学が何を提供できるのか分からない」という意見もある。稚内北星学園大学を念頭に置けば、今後地域産業に対する大学教育の露出を上げていくことが必要であると考えられる。

5.3. 仕事と大学研究の関連性

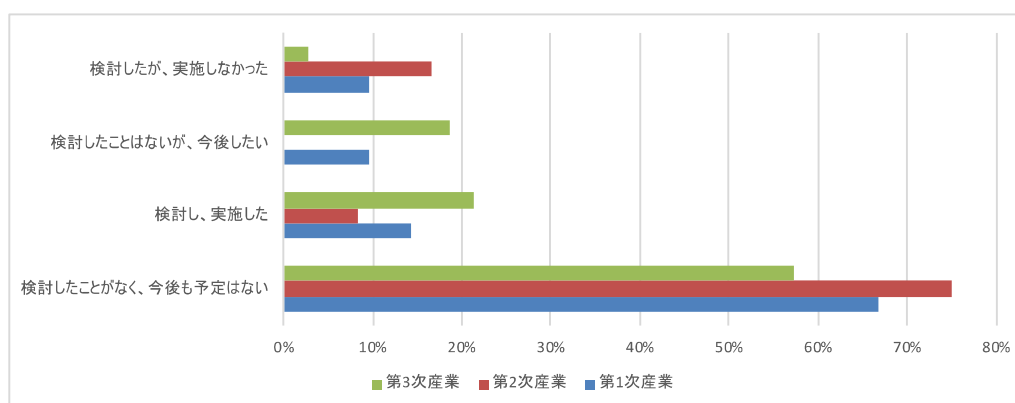


図 5-3 大学の研究を仕事に活用することについて（産業別）

5.2 と同様、地域産業にとっては、過半数が大学研究を有効活用する手がかりがないことが分かる。自由回答欄に寄せられた意見の中には、ICT の農業に対する適用、ロボットの魅力を子どもに伝えること、地域おこしの考え方の適用の期待といった提案がある一方、何を研究しているか分からないという意見もあった。大学教員も自

己の研究を地域の産業と関連させる産学連携の方策を模索する時期にきているのではないかとと思われる。

5.4. 稚内出身学生の雇用に対する意向

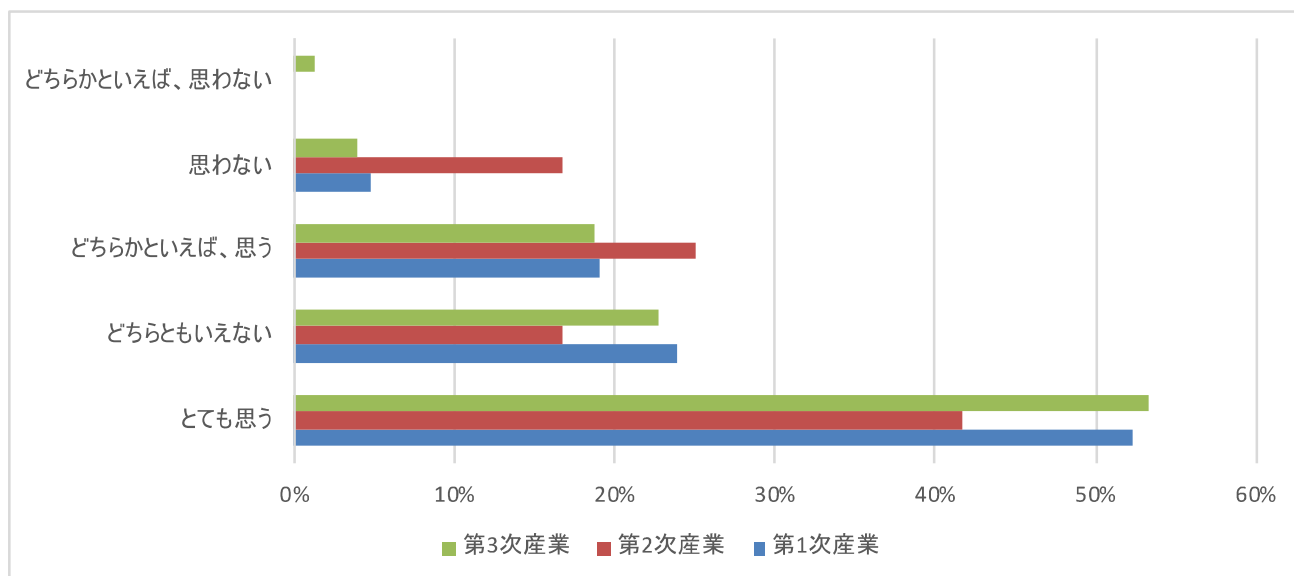


図 5-4 稚内出身の学生を雇用することに対する市民の意向（産業別）

5.1, 5.2, 5.3 の結果と対照的に、稚内市の産業は地元出身の学生の雇用に対して積極的であることが観察できる。「とても思う」「どちらかといえば、思う」の回答比率の合計は、どの産業でも6～7割に達する。労働市場における人手不足という現状を反映したものと思われるが、新卒者に対する高い需要を満足させるためには、新卒者のクオリティが高い方が望ましいことは言うまでもないだろう。稚内北星学園大学を念頭におけば、地域の産業が大学の意義をより理解するためには、大学のソフト力を普段の教育や産学連携といった研究プロジェクトといった側面から高めていく必要があると思われる。

5.5. 子どもの進路決定と大学

次に市民が親の立場から子どもの進学についてどのように考えているかについて、アンケートで幾つかの質問を行なっている。まずは、子どもの大学進学に対する親の意識を回答してもらった結果が図 5-5 である。

回答者の7割(68%)は、子どもがいないので回答できないため、それらを除いた残り32%の市民について比率をとったのが右図である。おおむね6割(60%)の市民が、子どもを大学に進学させたい意向をもっていることが分かる。これは高校生の進路意向と概ね同一の割合である。

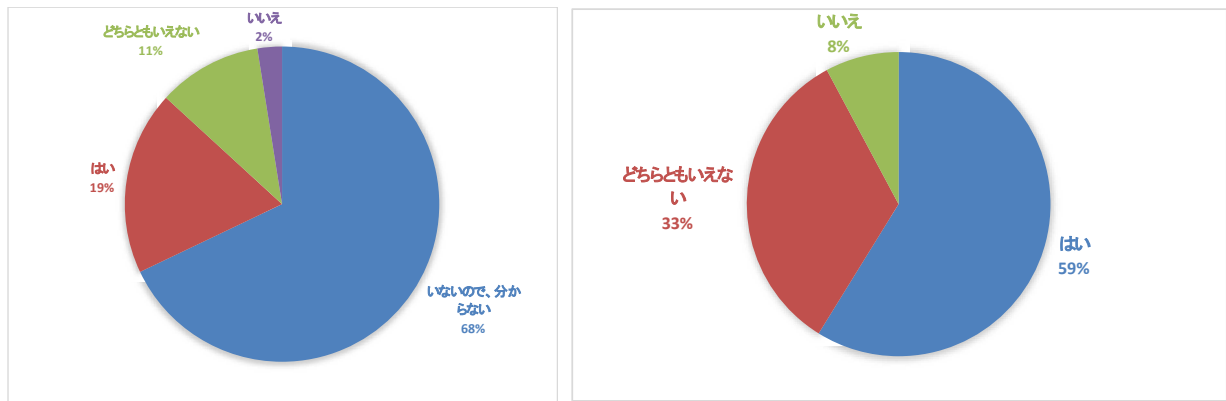


図 5-5 子どもを大学に進学させることに対する市民の意向
(左図は回答者全体、右図は「いないので、分からない」と回答した市民を除いたときの比率)

次に進学を控える子どもをもつ市民に対して、「地元の大学」に進学させることについて意向を回答してもらった。その結果が図 5-6 である。約 6 割が地元の大学に通わせたいと考えていることが明らかになった。

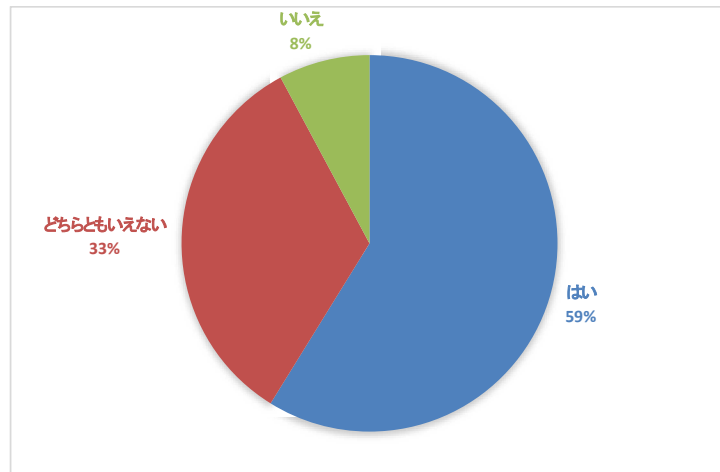


図 5-6 地元の大学に子どもを進学させることに賛成か？

通わせたくない、すなわち「いいえ」を選択した市民に、どのような条件があれば進学させてもよいかと問うた結果が図 5-7 である。高校生と同様、「学びたい事が学べる」選択肢への回答割合が最も多い。「その他」には「資格取得制度の充実」「国際的素養が身につけられる事」「地元にとって有用な人材の育成」「有名な先生がいること」が含まれている。

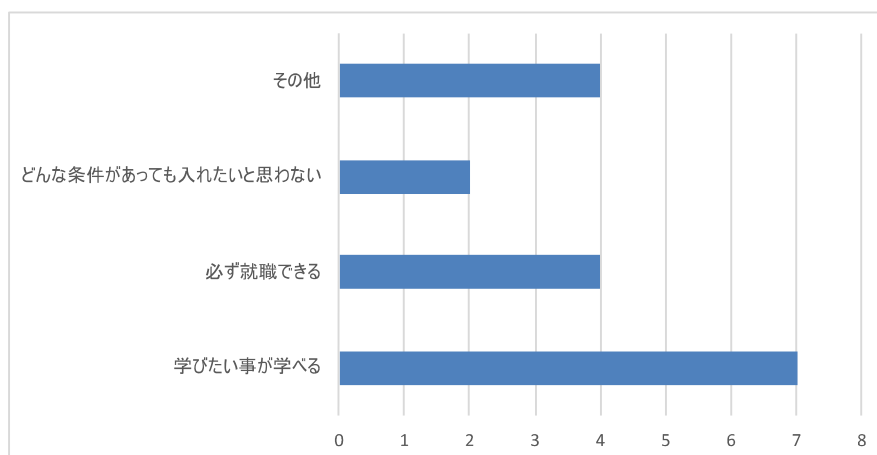


図 5-7 地元の大学に進学させるための条件（回答件数）

5. 6. 子どもの就職する地域

次に、高校卒業後の進路に直面する子どもがいる市民を対象に、地元で就職して暮らして欲しいかどうかに関する質問を行った結果が図 5-8 である。約 6 割(59%)が「どちらともいえない」と回答している。子ども自身の将来暮らす場所については親の意向ではなく子どもの意向に任せていると解釈することができるだろう。

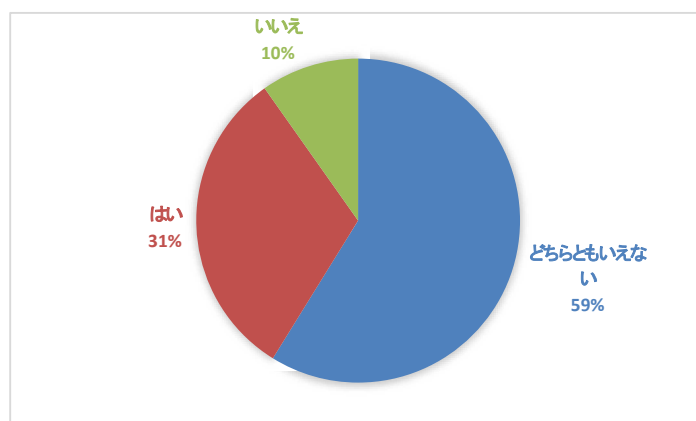


図 5-8 子どもに地元で就職して欲しいかに対する市民の回答

地域の大学が喪失されることによって、子どもの将来のキャリアに影響があると思うかどうかに対する市民の回答が図 5-9 である。ここでも「いいえ(思わない)」という回答が過半数を占めており、図 5-8 と併せて考えると、子どもの進路やキャリアに関して、親はそれほど干渉していない特徴が挙げられると思われる。

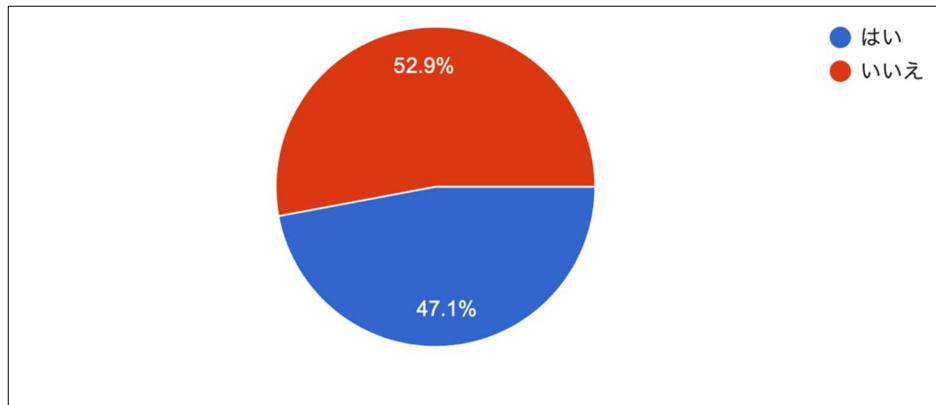


図 5-9 地域の大学の喪失が子どものキャリア形成に影響あるかに対する市民の回答

5.7. まとめ

以上、市民の「地域の大学・高等教育機関」に関する意義を、仕事との関連と進路選択を行う親の立場という 2 つの視点からアンケート によって明らかにしてきた。得られた結果をまとめると以下のようになる。

1. 仕事との関連について

- (ア) 過半数の市民が地域の大学と自身の仕事には関連がないと考えている。
- (イ) 60%～70%の市民は、大学卒業者に対する地元の産業の需要はあると考えている。
- (ウ) 一方で、大学で行われている教育、研究と地元の産業の関連性は低いと考えている市民が大半であり、地元の稚内北星学園大学を念頭に入れば、これを解消する産学連携の道を模索する必要があると思われる。併せて、地元産業の新卒者への需要が高いことを考えれば、質の高い学生を輩出できるよう今後一層の努力が必要である。

2. 進路選択を行う子をもつ親として

- (ア) 高校生と同様、6 割の市民が子どもを大学や高等教育機関に進学させたいと考えている。
- (イ) しかし、地元の大学に進学させるか、大学卒業後どこで職を得るかについては、市民の過半数が子ども自身に任せている。

5.8. 自由回答欄に寄せられたコメントについて

アンケート の末尾では、自由回答欄を設けてアンケート 自体や、地域の大学に関する意見や感想を自由に回答者に記述してもらっている。918 人の回答者のうち、111 人から記述をいただいた。そのうちおよそ 9 割が市民によるものである。本節では、それらを分類して紹介する。

5.8.1. 稚内北星学園大学の存続に対するコメント

2019 年下半期を通して、各種報道で稚内北星学園大学の存続に関する情報が市民に広く伝わっている。これに関連した存続に関するコメントの内容は大別すると 4 つに分けることができる。ひとつには、喪失を危惧する声である。経営の立て直しを希望する、地域の宝である、稚内市の活性化に必要である、という内容で要約される。

2 つ目には激励のコメントである。激励は「大学が地域の人々に知ってもらえる努力をもっとしてほしい」というこれまでの学生募集方策に対する批判的トーンが多い。3 つ目にはドローン講習、小中学生への学習支援といった稚内北星学園大学のリソースを自身や周囲が利用した経験を踏まえ、存続を歓迎するという趣旨のものである。4 つ目は、2020 年 4 月から経営を引き継ぐ新法人に対してで、これまでとはまったく異なる組織に経営を任せることへの警戒感を述べたコメントが多い。

5.8.2. 稚内北星学園大学の今後の方向性に関するコメント

回答者からは、提案や要望という形で稚内北星学園大学の進むべき道を示すコメントも多数いただいている。その中でも多いのが、「学科を増やす」趣旨のコメントである。進学のために市外にでる高校生の学びたい分野と同様、医療・福祉・看護に関する学科を増やしてはという提案が多かった。高校生へのアンケート分析で明らかになったように、彼らは自分の学べる場所が稚内北星学園大学ではなく市外にあるから、市外に出る意向をもつのである。この意味で、学べる選択肢を増やすというのは、今回の自由回答欄に寄せられた市民の声を反映させる方策のひとつとなり得るだろう。他にも短期大学の併設、地域のビジネスの役に立つマーケティングを学べるようにしたらどうかという提案もあった。

5.8.3. 地域の人々と大学の関係性に関するコメント

本論文と同じように、稚内市という地域に大学があることの意義に関する肯定的・否定的コメントも少なからず存在する。内容は多岐にわたる。稚内北星学園大学の経営難は表出したひとつの結果であり、大学法人の問題というより、その結果を招いた潜在的問題を地域全体で考えるべきという意見、存続のために様々な大人が頑張っているが、むしろ進路選択に直面した子どもの選択肢に入るような取り組みがあるのかという指摘、大学や卒業生が何をしているのかが見えないという嘆き、といった内容である。市民のこれらの指摘は、稚内北星学園大学の今後の地域活動の方向性、市民との関係性を考える上で貴重な情報になると思われる。

6. 結論と残された課題

6.1. 結論

以上、市内高校生と市民に対して、地域における大学の意義に関するアンケート調査を実施し、回答結果を分析してきた。まず、高校生については以下の 3 点が主要な結果として得られた。

1. およそ 75%の高校生が「地域に大学は必要」と考えている。
2. 高校生の卒業後の進路は多様であり、半数以上が「稚内では得られない就業・就学機会」を求めて市外に進学・就職する意向をもっている。しかしながら、進路にかかわらず、多くの高校生は「地域の高齢化・人口減少問題に歯止めをかけるように多くの学生が地域に集まり、地域が活性化すること」が、地域の大学の意義であると思っている。
3. ほぼ全ての高校生が「稚内北星学園大学」のことを知っているが、教育内容・地域活動に関する認識度はそれほど高いわけではない。名称のみ知っているのみの高校生も少なからず存在している。

多くの高校生が、この地域に大学があることに対して一定の必要性を認め、若者による地域活性化に期待を寄せている。これらから示唆される稚内北星学園大学の努力の方向性とは、今後いっそうの学生募集につとめること、同時に教育内容や地域活動に関して積極的に高校生に知ってもらうことの2点となると思われる。

また、半数以上が「稚内では得られない就業・就学機会」を求めて市外に進学・就職する意向をもっている現状の背景には、地域の過疎化という普遍的な問題があり、これは本学のみならず地域社会全体で検討してゆく課題であろう。

市民に対するアンケートの結果から得られたことについては、5.7の再掲分も含めて以下の通りである。

1. 83%の市民が「地域に大学は必要」と考えている。地域の大学への期待、喪失への懸念については、高校生よりも幅広い関心をもっている。
2. 稚内北星学園大学の教育・研究に関しては第3次産業からの認知度は満遍なく高いが、第1次・2次産業からの認知度は相対的に低い。
3. 仕事との関連について。
 - (ア) 過半数の市民が地域の大学と自身の仕事には関連がないと考えている。
 - (イ) 60%～70%の市民は、大学卒業者に対する地元の産業の需要はあると考えている。
 - (ウ) 一方で、大学で行われている教育、研究と地元の産業の関連性は低いと考えている市民が大半であり、地元の稚内北星学園大学を念頭に入れば、これを解消する産学連携の道を模索する必要があると思われる。併せて、地元産業の新卒者への需要が高いことを考えれば、質の高い学生を輩出できるよう今後一層の努力が必要である。
4. 進路選択を行う子をもつ親として。
 - (ア) 高校生と同様、6割の市民が子どもを大学や高等教育機関に進学させたいと考えている。
 - (イ) しかし、地元の大学に進学させるか、大学卒業後どこで職を得るかについては、市民の過半数が子ども自身に任せている。

これらの結果をまとめると、2つの課題が明らかになると考えられる。1つには、大学の教育内容などが市民・高校生両方に対して十分に伝わっていないという点である。この点については、主に市内の教育の場で、または市民を対象にした公開講座といった場で、その内容を継続的に紹介していく必要があるだろう。具体的な内容は、地域固有の問題に関すること、さらには地域に馴染みが薄い新しい技術や考え方の紹介といったものなどが考えられる。

もうひとつの課題は、地域の産業や高校生のニーズに応えるということである。このとき、大学は市民のニーズの受け手、単なる解決策の提示役となるだけでは十分ではない。より重要と思われるのは、大学が、アカデミックな情報やスキルをもって、地域に潜在する新しい問題点や可能性を掘り起こすということである。そのための大学の方策とは、教員の研究活動、学生の勉学の成果を積極的に地域の人々に提示する活動になると思われる。これを継続的に行うことで、地域固有の問題を大学と地域共同で解決するような動きが生まれ、地域の大学の価値

を高めることにつながると思われる。

6.2. 残された課題

地域の大学の意義と課題を地域の当事者たちに直接尋ねるような社会調査は全国的にもほとんど例がない。そのため、アンケートの配布手続きや方法について当初よりも時間がかかってしまったため、市民に対する回答期間が実質1ヶ月半程度の短い時間になってしまった。調査期間が短いと、市民の中の「稚内北星学園大学に対して関心がある」層に偏って回答を得ることになりかねない危惧がある。関心の薄い層に回答行動を起こしてもらうには、プロモーションや告知といったアンケート広報手段の充実が必要で、時間が限られていたためにこれらの実行が不十分となった。今回の「市民」はどちらかというと稚内北星学園大学に対して明確な関心を持っている市民に限定されてしまったと予想される。一方で、そのような市民からのコメントや回答結果は、稚内北星学園大学にとっては今後に向けて価値のある情報となるだろう。

また、今回の調査では、中学生にもアンケートを行う予定であったが、時間の都合上配布を行うことができなかった。進路選択を控えた市民として「高校生」に限定したアンケートとなったが、大学・就職をより身近な問題として捉えている彼らの意向に焦点を合わせることで、よりクリアな調査結果が得られたと思われる。

7. 補遺：稚内北星学園大学発足の歴史的経緯

7.1. 開学の経緯

稚内北星学園大学は前身に稚内北星学園短期大学をもつ。稚内北星学園短期大学は1987年に開学し、経営情報学科・英文学科を設置した(英文学科に教職課程を設置)。

稚内市を中心とする道北地域に高等教育機関を設置することは、地域が長年希望してきたことであった。特に、当時の浜森辰雄稚内市長は教育機関の充実に関心をもち、高等教育へと進む場合には市外に出るしかないことと、そのための保護者の経済的負担が多いこと、そのため高等教育進学率が低いことを憂慮していた²。

1978年1月に、稚内青年会議所が大学誘致特別常任委員会を設置し、同年6月に稚内市議会に大学誘致特別委員会が設置されたことで、大学誘致の動きが活発化した。1980年4月17日に稚内市大学誘致期成会が設立され、全市を挙げた大学誘致運動が本格化する。この期成会は、稚内市の経済界や教育機関を含む、役員約40名、委員約180名で構成されていた。

1982年5月に、稚内市が『高等教育機関の必要性と可能性—日本最北端の国際文化都市をめざして—』を作成し、高校の所在地や産業構成、将来的な展望から、高等教育機関の必要性を示した³。この時点で大学設

² 大学誘致の機運が高まっていた当時(1979年)の大学への進学率は、全国39.1%、全道27.4%、宗谷管内20.4%であり、北海道全域と比較しても低く、全国と比較して半分程度であった。

³ 本冊子によれば、当時の稚内市の高等教育のとらえ方は、「Ⅴ 地域社会と高等教育機関の役割」の「(1) 社会変動と高等教育システムの変化」において、マーチン・トロウを引用しつつ、高等教育機関は「次第に社会開放型、地域ニーズ型、万人就学型」となり、今後の高等教育機関配置について「地域社会における就学機会や地域振興人材育成等の側面を十分に考慮する必要がある」としている。
また、「(3) 地域社会と高等教育機関の役割」として、広島大学の大学教育研究センター「地域社会と大学」を引

置場所の候補、地域が必要としている学部学科(観光:観光学科、流通学科、外国語学科、貿易・経営学科、食糧:水産学科、海洋学科、酪農学科、食品栄養学科、エネルギー:資源工学科、エネルギー学科)等が記されており、前述の運動がある程度集約されていたものだと考えられる。

1983年には、稚内市市長公室企画課の中心的な業務として、大学誘致に向けた情報収集や設置のための事務手続きの研究が行われ始めた。同年5月に、稚内市議会に地域開発促進特別委員会が設置され、先の市長公室企画課がこの所管となり、大学誘致の審議が行われた。

そして同年11月に稚内市大学誘致期成会と北星学園が関係を持つこととなった。きっかけとなったのは、北星学園女子短期大学の木村謙二学長(当時)が、稚内市幼児教育研究協議会の講演会講師として来市したことである。木村氏は浜森市長を表敬訪問し、そこで大学誘致に対する浜森市長の考えを聞き、北星学園の稚内進出についての可能性を打診した。翌12月に、稚内市大学誘致期成会と稚内市議会は、札幌の学校法人北星学園との懇談会を開催し、稚内への大学設置について意向を打診した。また、同時期に『高等教育機関の必要性と可能性—日本最北端の国際文化都市をめざして—』の改訂版が発行されている。この時点で、望まれる学部学科は「観光:観光学科、流通学科、貿易・経営学科、外国語:外国語学科(英語、ロシア語)」に絞られている⁴。

この1983年12月に開催された話し合いに基づき、1984年1月7日、稚内市は学校法人北星学園に対し、稚内市への短大設置を正式に要請した。稚内市は学校法人北星学園による直接の設置を望んだが、当法人は多額の負債を抱えており厳しい経済状況にあったことから、「稚内への別法人による短大設置」ならば可とし、教育面での基盤整備については学校法人北星学園が担う事となった。一方、新たな学校法人を設立するため、用地・校舎・設備・初年度運営資金については稚内市が全面的に負担することとなった。このような経緯で、公設民営による短期大学設置が正式に決定した。

1978 年	1 月		稚内青年会議所に大学誘致特別常任委員会を設置。 同年に保護者アンケート。希望する学部・学科があれば、進学させるかどうかを調査。75%が進学するとの回答。ただし、調査手法に疑問あり(当時の担当者)。
	6 月	24 日	稚内市議会に大学誘致特別委員会を設置。
1980 年	4 月	17 日	稚内市大学誘致期成会(役員40名、委員約180名)を設立。
1982 年	5 月		稚内市「高等教育機関の必要性と可能性—日本最北端の国際文化都市をめざして—」発行。
	10 月	1 日	稚内市大学誘致準備室を設置。
1983 年	4 月		稚内市役所に、大学設置担当部署として市長公室企画課を設置。
	5 月		稚内市議会に地域開発促進特別委員会を設置。
	11 月	11 日	北星学園女子短期大学木村謙二学長、稚内幼小連合会主催の講演会講師として来稚。元教育長(元中央小学校初代校長)の澤田文吉氏の仲介で、浜森辰雄市長(当時)とも面談。この時期より、北星学園大学の協力を得ながら、大学設置をする方向性が定まり始める。

用しながら、「①教育機会と進学動向の関係、②就学機会と卒業生の動向、③地域の市民行政との関係……などの効果的方向付けが必要である」としている。また、「地域関係講座や地域研究センターなどの配慮が必要である」など、地域社会のシンクタンクとしての機能を当初より期待していた。また、朝日新聞による「人口100人あたり学生数」の調査から、札幌を除く道内のエリアはすべて全国平均を下回っており、宗谷エリア(宗谷支庁全域、留萌支庁北部、上川支庁北部)では学生人口ゼロエリアであることも意識されている。

⁴ 観光学科が東北以北地域で皆無だったことと、国境を接する地域として、観光においても海外からの旅客を期待しており、外国語の習得が望まれていたこと等が理由。

	12月		稚内市「高等教育機関の必要性と可能性＝日本最北端の国際文化都市をめざして＝（改訂版）」を発行。 稚内市議会が札幌で北星学園大学と懇談会。大学設置の相談。
1984年	1月	7日	学校法人北星学園理事会に対し、稚内市への進出の陳情。
	4月	27日	学校法人北星学園理事会及び評議員会において新法人による短大設置を決定。
	5月	25日	学校法人稚内北星学園設立発起人会を開催（札幌第一ホテル）。稚内北星学園設立準備委員会を発足。委員長に時任正夫氏が就任（後の学園法人理事長）。 準備委員会においては、観光経営100名、英文100名、幼児教育100名の、計300名の男女共学の短期大学を検討。この時から、学長は木村謙二氏（当時北星学園女子短大学長）、事務局長は澤田文吉氏（元稚内市教育長、中央小学校初代校長）が就任予定だった。
	7月	21日	稚内市大学誘致期成会総会「稚内北星学園短期大学建設期成会」に改称。
	7月	30日	文部省へ第1次申請書を提出。
1985年	10月	29日	私立大学審議会ヒアリング。経営面。稚内市市役所に担当部署を設置して対応。
	10月	30日	大学設置審議会ヒアリング。教学面。北星学園大学内に担当部署を間借りして対応。
	11月	5日	基礎工事着工
	12月	19日	第1次審査結果発表→可
1986年	3月	7日	校舎工事着工
	6月	30日	文部省へ第2次申請書提出
	8月	1日	稚内北星学園短期大学定礎式
	9月	24日	私立大学審議会による実地調査。
	9月	26日	大学設置審議会による実地調査。校舎建設完了前のため教具や図書等を市役所正庁で。
	11月	27日	校舎工事竣工
1987年	2月	3日	学校法人稚内北星学園並びに稚内北星学園短期大学正式認可
	2月	10日	第Ⅰ期入学試験実施（英文科16／80名、経営情報学科90／100名）
	2月	16日	学校法人稚内北星学園法人登記完了
	3月	5日	第1回学校法人稚内北星学園理事会
	3月	9日	第Ⅱ期入学試験実施
	3月	28日	第1回学校法人稚内北星学園評議員会
	4月	15日	第1回稚内北星学園短期大学入学式

表2 稚内北星学園短期大学開学までの経緯

7.2. 開学後の概況

前述のような経緯を経て、1987年2月3日に学校法人稚内北星学園、並びに稚内北星学園短期大学が経営情報学科、英文学科の二学科体制で正式に認可され、同年4月から学生の受け入れがスタートした。正式認可前には積極的な入学募集ができず、初年度は106名（英文学科16名（定員80名）、経営情報学科90名（定員100名））と、定員割れのスタートとなった。

1990年度入学者が定員を超え、その後も定員充足率が好調だったことから⁵、1992年には教授会において4年制大学への改組転換を決議。1999年に文部省より認可を受け、2000年から4年制大学へ移行した。ところが、その後は定員を充足することができず、学生数確保のため2004年に東京サテライト校を開設し、社会人を受け入れた。東京サテライト校は、開設2年目こそ期待を大きく上回って92名の入学者を迎えたが、5年目の2008年には11名に激減し、翌2009年には入学者0となり、2012年に学生募集が打ち切られた。

さかのぼって、4年制大学移行後、2003年に、前年の入学者113人から65名まで激減した稚内本校の入学

⁵木村謙二学長（当時）による「年頭所感」（1992年1月1日、稚内プレス）より。

者はその後も回復せず、2007年には大学の存続について検討され、存続されるも10月に学長が辞任。

2009年には地域創造学科を設置し、街のイベント企画の立案・実行力の養成、現場の経験を重視した社会情報学の学習など、地域や職業を意識した学習内容を志向するが、入学者の増加にはつながらず、2015年度の学生募集を停止。同年から職業を意識した5コースを設置したが、コース制も見直しの対象となり、2018年度入学生まででコース制は廃止された。また、体制の未整備により、2019年度秋からは留学生の募集を停止している。

※以上の内容は、大学評価学会第15回全国大会シンポジウム「大学評価のリアリティーグローバル化とローカル化のはざままで―」(2018年3月3日、於:別府大学)における報告、米津直希「『地方小規模大学』の評価と課題」の配布レジュメから抜粋したものである。

8. 資料

8.1. 高校生向けアンケート

高校生向け

地域の大学に関するアンケート

このアンケート調査は、「地域の大学のこれまでを振り返り、これから考えること」を目的とした調査で、稚内北星学園大学の有志が主催しています。ご協力をお願いいたします。

※本研究会の活動はあくまで研究的活動であり、アンケート調査は、「大学を存続させるための運動」ではなく、客観的分析のための調査を目的とするものです。
※みなさんにご回答いただいた内容に関しては、本研究会の目的以外には使用いたしません。
また、みなさんのご回答を集計した後、その結果は必ず公表いたします。

- あなたの年齢を以下からひとつ選んでください。
10代 / 20代 / 30代 / 40代 / 50代 / 60代 / 70代以上
- あなたの性別を以下からひとつ選んでください。
男性 / 女性 / 無回答
- お住まいの地域をひとつ選んでください。市外の方は「その他」にお住まいの地域名をご記入ください。
☐ 稚内が丘中学校周辺地区(富岡1-6丁目、萩見4-5丁目、朝日1-6丁目、新光町、若葉台)
☐ 稚内中学校周辺地区(中央1-5丁目、宝来1-5丁目、東比須1-5丁目、蘭瀬1-2丁目、ノシャップ1-5丁目)
☐ 稚内南中学校周辺地区(東成1-2丁目、新東成、緑1-6丁目、大黒1-4(1-7番)丁目、こまどり1-5丁目、港1-5丁目、新港町)
☐ 稚内東中学校周辺地区(東成3-5丁目、萩見1-5丁目、大黒4(8番)-5丁目、萩見1-3丁目、東1-5丁目、はまなす1-5丁目、奥間1-5丁目、メクラ)
☐ 真土見・西浜地区(真土見1-5丁目、西浜1-4丁目)
☐ 陸奥・奥知地区(赤松、外ヶ浦、メナナイ、奥知、オホメナナイ、ユウクル、上奥知、サラキマナイ)
☐ 未定地区(深川、由利、川西、川東、蘭浜、神岡、上奥知、下奥知、上奥知、大奥、磯、増穂、黒北)
☐ 宗谷地区(宗谷、瀬田、宗谷町、峠岡、富樫、東浦)
☐ その他
- あなたは高校卒業後、進学したいですか？
はい → **質問 5** に進んでください。 / いいえ → **質問 12** に進んでください。
- あなたは、地域の大学に入学して勉強することを考えていますか？
はい → **質問 6** に進んでください。 / いいえ → **質問 8** に進んでください。
- 地域の大学に入学したい理由を教えてください。あてはまるものをすべて選んでください。
☐ 地元だから / ☐ 稚内が好きだから / ☐ 家族や親せきがいるから / ☐ 友だちや恋人がいるから
☐ 学びたい事が学べるから / ☐ お金がかからないから / ☐ などとなく
その他
- 「学びたい事が学べる」を選択した方にお聞きします。具体的に学びたい分野があれば教えてください。

→ **質問 9** に進んでください。

- どんな条件があれば、地域の大学に入学したいと思えますか。該当するものをすべて選んでください。
☐ 自分の学びたいことが学べる / ☐ 学費が安い / ☐ 有名な先生がいる友達がたくさんいる
☐ 卒業後、必ず就職できる / ☐ どんな条件があっても入学したいとは思わない

- あなたは「市外の大学」に入って勉強することを考えていますか？
はい → **質問 10** に進んでください。 / いいえ → **質問 12** に進んでください。

「地域の大学(高等教育機関)」についてうかがいます。

- 稚内に大学(現在の大学とは限りません)が必要だと思いますか？
はい / いいえ
- これからのくらし・仕事・行政を考えた場合、地域の「大学(高等教育機関)」にどのようなことを期待しますか？
☐ 地域社会の働き手として高い知性・知能を備えた社会人を輩出すること
☐ ドローンや3Dプリンター等の最先端技術・設備・器材・資料に知れる機会を増やすこと
☐ 地域の暮らしを向上させるような、専門性を活かした新しいアイデアや技術が生まれること
☐ 外国と地域の連携した、国際的な活動ができること
☐ 市内・市外からも広範囲に学生が集い、地域に活力がもたらされること
☐ 特に何も期待していない
☐ その他
- 今後、この地域に大学(高等教育機関)が存在しないとしたら、どのような懸念が考えられますか？該当するものをすべて選んでください。
☐ 地域の高校生が大学選びをする際に、選択肢が1つ減るのではないかな
☐ 資格試験やセンター試験などで、試験や研修などの準備が楽になり、移動のための時間や費用が増えるのではないかな
☐ アルバイトやボランティアなどの用事が不足するのではないかな
☐ 地域の産業や国際化対応を担うことができる労働力や公務員が減少するのではないかな
☐ 新しい技術やアイデアを導入する機会が減り、地域全体の経済が停滞するのではないかな
☐ 地域の若年人口は減少問題が加速するのではないかな
☐ 特に懸念はない
☐ その他
- 本アンケートについて、ご意見・ご感想などがございましたら、自由にお書きください。

以上で回答は終了です。

このたびは貴重なお時間を使ってご回答をいただき、どうもありがとうございます。集計分析結果は、必ず皆様へ公表いたします。このたびはご協力をいただき、どうもありがとうございます。

- 市外の大学に進学したい理由として該当するものを以下の中からすべて選んでください。

都合に出たいから / ☐ 稚内が好きじゃないから
稚内の大学では学びたい事が学べないから / ☐ などとなく

その他

- 「稚内の大学では学びたい事が学べないから」を選んだ方にお聞きします。市外の大学で学びたい分野についてお書きください。

- あなたは高校・大学を卒業後、稚内で働いたり、暮らしたいと思えますか？
はい → **質問 13** に進んでください。 / いいえ → **質問 14** に進んでください。

- その理由として該当するものを以下の中からすべて選んでください。

☐ 地元だから / ☐ 稚内が好きだから / ☐ 家族や親せきがいるから
☐ 友だちや恋人がいるから / ☐ 設きたい職業があるから / ☐ などとなく
その他

→ **質問 15** に進んでください。

「卒業後稚内で働いたり暮らしたい」「いいえ」と答えた方にうかがいます。

- その理由として該当するものを以下の中からすべて選んでください。

☐ 都合に出たいから / ☐ 稚内が好きじゃないから / ☐ やりたい仕事などがないから
などとなく / ☐ その他

→ **質問 15** に進んでください。

稚内北星学園大学について

宗谷管内唯一の4年制大学である、「稚内北星学園大学」について伺います。早速なところをご回答いただけますようお願い申し上げます。

- 稚内北星学園大学を知っていますか？
知っている → **質問 16** に進んでください。 / 知らない → **質問 20** に進んでください。

- 本学が提供する【教育内容】について、ご存知のものがございましたらチェックを入れて下さい。

☐ グローバル・ネットワーク・チーム・ベースといったIT技術
☐ 教養課程(学校教育)および数学に関する分野
☐ 映像・写真を用いた表現や作品制作
☐ まちづくり、観光、外国語、地域経済といった地域社会に関する分野
☐ 図書館に関する情報や資料に関する分野

- 本学所属教員の【研究内容】について、ご存知のものがございましたらチェックを入れて下さい。

☐ 新創業(IT・ベンチャーなど)
☐ IoT(モノのインターネット)やIT技術に関すること
☐ 学校教育・生涯教育まちづくり・スポーツ観光・ビジネス
☐ 映像・写真・ゲームを用いた作品制作

- 本学教職員・学生の、地域での活動について、ご存知のものがございましたらチェックを入れて下さい。

☐ 小中学生を対象とした学習支援活動
☐ 地域や市が主催するイベントへの参加
☐ ボランティアなどの社会貢献活動地域の活性化に関わる活動
☐ 地域の社会や人を対象・題材とした映像作品

- 本学の地域活動について、上記以外でご存知のことがありましたら、教えてください。

8.3. アンケート 仕様

質問文	変数	質問対象	質問の意図
“タイムスタンプ” “あなたの年齢を以下から1つお選びください。” “あなたの性別を以下からひとつお選びください。” “お住まいの地域を以下からひとつ選択してください。市外の方は「その他」にお住まいの地域名をご記入ください。”	“timestamp”, “q01_1”, “q01_2”, “q01_3”, “q01_4”, “q01_5”,	全員 全員 全員 全員 市民 全員	基本属性
“稚内北星学園大学・短期大学（夜間主も含む）の卒業生の方は、下にチェックを入れてください。” “ご自身の職業について、最も当てはまるものをひとつお選びください。学生の方は、「中学生、高校生、大学・高専・専門学校生」から該当するものをひとつお選びください。” “あなたの学年をひとつ選んでください。” “進路についてうかがいます。あなたは高校卒業後、進学したいですか？” “あなたは、地元の大学に入学して勉強することを考えていますか？” “地元の大学に入学したい理由を教えてください。” “「学びたい事が学べる」を選択した方にお聞きします。具体的に学びたい分野があれば、それを教えてください。” “どんな条件があれば、地元の大学に入りたいと思いますか？該当するものに全てチェックを入れてください。” “あなたは「市外の大学」に入って勉強することを考えていますか？” “市外の大学に進学したい理由として該当するものを以下の中から全て選んでチェックを入れてください。” “「稚内の大学では学びたい事が学べないから」を選んだ方にお聞きします。市外の大学で学びたい分野についてお書きください。” “あなたは高校・大学を卒業後、稚内で働いたり、暮らしたいと思いますか？” “その理由として該当するものを以下の中から全て選んでチェックを入れてください。” “その理由として該当するものを以下の中から全て選んでチェックを入れてください。”	“q02_1”, “q02_2”, “q03_1”, “q04_1”, “q04_2”, “q05_1”, “q06_1”, “q07_1”, “q07_2”, “q08_1”, “q09_1”, “q10_1”,	中高生 中高生 中高生 中高生 中高生 中高生 中高生 中高生 中高生 中高生 中高生 中高生	高校卒業後の 進路（進学と就職）の 意向
“ご自身のお仕事と、大学が提供する研究や教育の間に、何らかの関連があると思いますか？[右からひとつお選びください。]” “ご自身のお仕事の中で、大学の【教育】の活用を検討したことがありますか？[右からひとつお選びください。]” “「検討したが実施しなかった」「検討したことはないが、今後したい」と回答された方にうかがいます。差し支えなければ、その内容について教えてください。” “ご自身のお仕事の中で、大学の【研究】の活用を検討したことがありますか？[右からひとつお選びください。]” “「検討したが実施しなかった」「検討したことはないが、今後したい」と回答された方にうかがいます。差し支えなければ、その内容について教えてください。” “稚内出身の学生を積極的に採用したい(してほしい)と思いますか？[右からひとつお選びください。]”	“q11_1”, “q11_2”, “q11_3”, “q11_4”, “q11_5”, “q11_6”,	市民 市民 市民 市民 市民 市民	仕事と 大学の 関係性
“将来、子どもを大学に進学させたいと思いますか？” “子どもに、地元の大学に入ってほしいと思いますか？” “どんな条件があれば、稚内の大学に入りたいと思いますか？該当するものを全て選んでチェックを入れてください。” “将来子どもに、稚内で働いたり、暮らしたりしてほしいと思いますか？” “稚内から大学がなくなるとしたら、子どものキャリア形成(進路)に影響がありますか？” “稚内北星学園大学を知っていますか？”	“q12_1”, “q12_2”, “q13_1”, “q14_1”, “q14_2”, “q15_1”,	市民 市民 市民 市民 市民 市民	子どもの 進路に関する 親の意向
“本学が現在提供している【教育内容】について、ご存知のものがありましたら、「知っている」、それ以外は「知らない」を選択してください。[プログラミング・ネットワーク・データベースといったIT技術]” “本学が現在提供している【教育内容】について、ご存知のものがありましたら、「知っている」、それ以外は「知らない」を選択してください。[教職課程(学校教育)および数学に関する分野]” “本学が現在提供している【教育内容】について、ご存知のものがありましたら、「知っている」、それ以外は「知らない」を選択してください。[映像・写真を用いた表現や作品制作]” “本学が現在提供している【教育内容】について、ご存知のものがありましたら、「知っている」、それ以外は「知らない」を選択してください。[まちづくり、観光、外国語、地域経済といった地域社会に関する分野]” “本学が現在提供している【教育内容】について、ご存知のものがありましたら、「知っている」、それ以外は「知らない」を選択してください。[図書館に関する情報や資格に関する分野]”	“q16_1.1”, “q16_1.2”, “q16_1.3”, “q16_1.4”, “q16_1.5”,	全員 全員 全員 全員 全員	稚内北星学園大学 に関する 認知度
“本学所属教員の【研究内容】について、ご存知のものがありましたら、「知っている」、それ以外は「知らない」を選択してください。[制御系(ETロボコンなど)技術]” “本学所属教員の【研究内容】について、ご存知のものがありましたら、「知っている」、それ以外は「知らない」を選択してください。[IoT(モノのインターネット)やIT技術に関すること]” “本学所属教員の【研究内容】について、ご存知のものがありましたら、「知っている」、それ以外は「知らない」を選択してください。[学校教育・生涯教育]” “本学所属教員の【研究内容】について、ご存知のものがありましたら、「知っている」、それ以外は「知らない」を選択してください。[まちづくり・スポーツ]” “本学所属教員の【研究内容】について、ご存知のものがありましたら、「知っている」、それ以外は「知らない」を選択してください。[観光・ビジネス・地域経済]” “本学所属教員の【研究内容】について、ご存知のものがありましたら、「知っている」、それ以外は「知らない」を選択してください。[映像・写真・ゲーム等を用いた作品制作]” “本学所属教員の【研究内容】について、ご存知のものがありましたら、「知っている」、それ以外は「知らない」を選択してください。[図書館情報学]” “本学所属教員の【研究内容】について、ご存知のものがありましたら、「知っている」、それ以外は「知らない」を選択してください。[高等教育]” “本学所属教員の【研究内容】について、ご存知のものがありましたら、「知っている」、それ以外は「知らない」を選択してください。[英語]”	“q16_2.1”, “q16_2.2”, “q16_2.3”, “q16_2.4”, “q16_2.5”, “q16_2.6”, “q16_2.7”, “q16_2.8”, “q16_2.9”,	全員 全員 全員 全員 全員 全員 全員 全員 全員	
“本学教職員・学生がこれまでにやってきた、【地域での活動】についてご存知のものがありましたら「知っている」、それ以外は「知らない」を選択してください。[小中学生を対象とした学習支援活動]” “本学教職員・学生がこれまでにやってきた、【地域での活動】についてご存知のものがありましたら「知っている」、それ以外は「知らない」を選択してください。[地域や市が主催する祭・イベントへの参加]” “本学教職員・学生がこれまでにやってきた、【地域での活動】についてご存知のものがありましたら「知っている」、それ以外は「知らない」を選択してください。[ボランティアなどの社会貢献活動]” “本学教職員・学生がこれまでにやってきた、【地域での活動】についてご存知のものがありましたら「知っている」、それ以外は「知らない」を選択してください。[地域の活性化に関わる活動]” “本学教職員・学生がこれまでにやってきた、【地域での活動】についてご存知のものがありましたら「知っている」、それ以外は「知らない」を選択してください。[社会や人を対象・題材とした映像作品]” “本学の地域活動について、上記以外でご存知のことがありましたら、教えてください。”	“q16_3.1”, “q16_3.2”, “q16_3.3”, “q16_3.4”, “q16_3.5”, “q16_4”,	全員 全員 全員 全員 全員 全員	
“稚内に大学（現在の大学とは限りません）が必要だと思いますか？”	“q17_1”,	全員	地域の大学の 必要性
“これからの暮らし・仕事・行政を考えた場合、地域の「大学/高等教育機関」にどのようなことを期待しますか？特に期待することを1つだけ、お選びください。” “今後、この地域に大学/高等教育機関が存在しないとしたら、どのような懸念が考えられますか？該当するものを全て選んで、チェックを入れてください。” “本アンケートについて、ご意見・ご感想などがございましたら、自由にお書きください。”	“q18_1”, “q19_1”, “q20_1”	全員 全員 全員	地域の大学の 価値 意見

Significance and issues of regional university

: A study from questionnaire survey for the high school students and citizens

This paper aims to report the research results conducted by a voluntarily and independently organized study group by professors at Wakkanai Hokusei Gakuen University. We, the study group, conducted the social survey named “a questionnaire regarding a university in the region” in the late December, 2019, which investigated attitudes of citizens towards the university of the region. Using results obtained from the survey, we look back and summarize the operations that the university has taken so far, and investigate its way forward in the region. We find that many of the citizens appreciate the university of the region, and expect it to vitalize the regional society. On the other hand, we also find that interests among the citizens, including high school students, do not coincide with those of the university, and the content of education and research in the university is not fully understood by the citizens. Thus, it is suggested that, in order for the university to play a role of the regional university, it needs to put efforts to inform them more about what the university provides, and to provide them with the information as to how the university can meet the needs from the region.